

那珂 80

——那珂遺跡群第170次調査の報告——



2020

福岡市教育委員会

序

福岡市は、古くから大陸との文化交流の門戸として、また対外交易や外交の窓口として栄えてきた地域であります。このような歴史的環境のもとに、市内には数多くの史跡や文化財が残されており、本市におきましては保護と活用に努めているところであります。しかしながら、都市の発展に伴う開発行為によってやむを得ず失われていく埋蔵文化財もあり、これらについては事前に発掘調査を行つて、記録保存を行っています。

本書は、博多区那珂三丁目地内の那珂小学校内における留守家庭子ども会施設改築工事に伴い行われた、那珂遺跡群第170次発掘調査について報告するものです。

那珂遺跡群は、弥生時代から古墳時代前期、古墳時代後期から飛鳥・奈良時代にかけて、福岡平野では中心的な遺跡であったことが知られています。

今回の調査においても、弥生時代初め頃の貯蔵穴、弥生時代中期から中世の各時代の井戸、古墳時代初め頃の古墳の周溝（方形周溝墓）と考えられる溝が検出され、弥生時代以降、連続と人々の営みが続いていることが判明しました。また調査中には、那珂小学校の授業の一環として発掘調査の見学会も行われ、子どもたちが郷土の歴史について考えるきっかけを作ることもできました。

今後本書が、文化財保護への理解と認識を深める一助となり、学術的な研究資料として、また地域の歴史の学習の材料として活用して頂きましたら幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から資料整理、報告書作成にいたるまで、ご理解と多大なご協力をいただいた調査委託者および那珂小学校をはじめとする関係者の方々に対し、心より感謝の意を表す次第であります。

令和2年3月25日

福岡市教育委員会
教育長 星子 明夫

例 言

1. 本書は、福岡市教育委員会が、平成29年4月25日から同年6月22日まで発掘調査を実施した、留守家庭子ども会建設（改築）工事に伴う、記録保存のための那珂遺跡群第170次調査の報告書である。
2. 発掘調査は、建設工事によって遺構が影響を受ける範囲について行った。なお中世の大溝遺構の一部は地下に現状保存されている。
3. 遺構の呼称は記号化し、溝状遺構をS.D.、土坑（貯蔵穴も含む）をS.K.、柱穴などピット状遺構をS.P.、その他の遺構（不明遺構、特殊遺構、近代以降の埋置）をS.X.とした。
4. 本書の遺構図に用いる方位北は、特に断りがないものは国土地理院「世界測地系」である。ただし個別遺構図においては、磁北も併用している。磁北は真北から西偏約6°20'である（国土地理院からは西偏約6°40'）。調査地付近の国土地理院点（世界測地系）は、国土交通省が各所に設置している都市再生街区基準点から座標位置を求めている。なお、周辺調査地点での座標系は日本測地系第II系のため、国土地理院ホームページの変換表を用いて、調査区における日本測地系座標も求めている（Fig.4）。また調査区内の標高は、道路下水道局が設置・管理している那珂小学校における水準標高（7.911m）から移動して用いている。
5. 本書に用いる遺構図の作成は、調査担当の久住猛彦および、萩原士寛（埋蔵文化財課）、中園将洋（埋蔵文化財課嘱託）、坂口剛毅（埋蔵文化財課技能員）が行った。遺物の実測図作成者は下記の通りである。土器・陶器類は主に野村美樹、久富美智子、林田恵三、立石真二、平田春美（埋蔵文化財技術員）、西尚史（当時：福岡大学大学院）が行い、一部を久住が行い、製図時に久住が各図をチェックし一部修正加筆した。木器の実測は、林田が主に行い、「折敷」のみ比佐剛一郎（埋蔵文化財センター）が行った。鉄器は林田、山下理呂（九州大学大学院）が実測した。石器の実測は、主に立石が行い、「板石礫」のみ久住が行った。製図は、遺物図全てと遺構図の一部を久住が行い、遺構図の一部を小畠貴子、林由紀子（埋蔵文化財課整理補助員）、山下が行った。また本書に用いる遺構・遺物写真は、木器の「折敷」を比佐が、鉄器X線写真を比佐、松庭奈徳（埋蔵文化財センター嘱託）が撮影したが、他の全ては久住が撮影したものである。
6. 本書の執筆と編集は久住が行った。
7. 本調査に関わる出土遺物と記録類（図面、写真等）は、全て埋蔵文化財センターに収蔵され、管理される予定である。

本文目次

| | |
|-------------|----|
| I. はじめに | 1 |
| II. 調査の記録 | 10 |
| 1. 調査の概要 | 10 |
| 2. 検出遺構 | 14 |
| 3. 出土遺物 | 35 |
| III. 調査のまとめ | 52 |



1. I 区中央～南半 SE03, SE02, SE06, SE08 挖削状況（北から）



3. II 区掘削状況全景（北から）



2. I 区北半 SE02, SE01, SE03 挖削状況
(東から)



4. SE01 上層土層状況および方形井戸枠痕跡
井戸側落込検出状況（南から）



5. SE01 井戸側落込 EL -330cm まで掘削状況
(南から)



6. SE02 下層上部（I + V 区 - 100 cm）井戸枠痕跡、曲物、
木製品検出状況（北東から）

巻頭図版2



1. SE02 下層上部（I・V区—100 cm）曲物、木製品検出
状況近景（北東から）



2. SE02 下層上部井戸側落込「折敷」出土状況（東から）



3. SE02 ほぼ完掘状況（南から）



5. SE03, SX04 最上層掘削状況（南から）



4. SE02 最下層上部井戸側枠材遺存状況（西から）



7. SE03 西側上層遺物出土状況（東から）



6. SX04 西側半裁土層状況（西から）



8. SE03 下層上部 EL-200cm 掘削状況（北から）



1. SE03 最下層重機掘削確認状況
(南から)



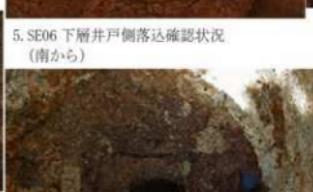
2. SE06 上面検出状況（西から）



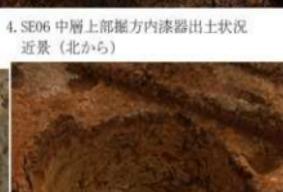
3. SE06 中層上部掘方内鹿角・漆器出土状況
(南から)



6. SE06 下層上部遺物出土状況近景
(北から)



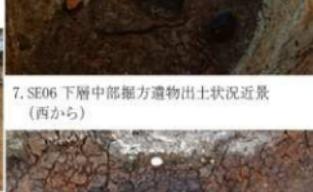
5. SE06 下層井戸側落込確認状況
(南から)



4. SE06 中層上部掘方内漆器出土状況
近景（北から）



9. SK05 完掘土層状況（東から）



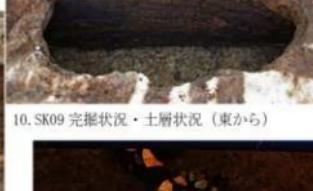
7. SE06 下層中部掘方遺物出土状況近景
(西から)



8. SE06 完掘状況（北東から）



11. SX104 (・SD102-VI区北) 土層状況
(東から)



10. SK09 完掘状況・土層状況（東から）



12. SD101-0 区北～I区下層遺物出土状況
(南から)

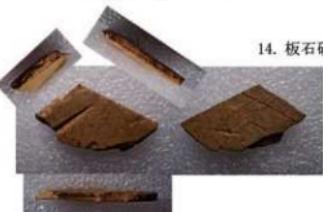
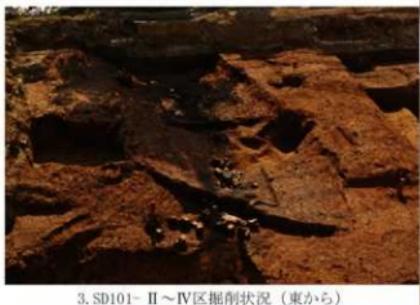


13. SD101-I 区下層遺物出土状況近景
(北から)



14. SD101-I 区下層遺物出土状況近景
(西から)

巻頭図版 4



I. はじめに

1. 調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、同市博多区那珂三丁目地内の那珂小学校敷地内における留守家庭子ども会施設改築工事に伴う「埋蔵文化財の事前審査について（依頼）」の文書を平成28年8月10日付でこども未来局放課後こども育成課から受理した（事前審査番号28-1-77）。

これを受け、経済観光文化局文化財部埋蔵文化財課事前審査係は、工事予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地である那珂遺跡群（分布地図番号0085）に含まれており、当該地の過去の確認調査や対象範囲隣接の発掘調査（那珂遺跡群104次調査）の成果から、当該地は埋蔵文化財が存在することが明らかと判断した。遺構の密度や深度の再確認のため、さらに同地で平成28年10月25日に確認調査を行ったが、比較的浅い深度で遺構が検出され、予定される施設改築の基礎工事等は、埋蔵文化財に影響が及ぶものと判断された。その埋蔵文化財の保全等に関してこども未来局と協議を行った。

その結果、埋蔵文化財を保全するための工事の設計変更は難しく、予定工事は埋蔵文化財への影響を回避できないことから、施設改築工事範囲について記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。また両者の協議により、平成29年4月25日から同年6月9日までを現地における発掘調査の期間とすることになった。

発掘調査は平成29年4月25日に開始した。調査開始後に、事前の予想を超えて井戸遺構が集中して検出されたため、6月9日とした当初の終了予定は困難な状況であることが判明した。このため、埋蔵文化財課とこども未来局放課後こども育成課で協議を行い、発掘調査期間について若干の延長を行うことで合意した。また発掘調査後半で検出した中世の大溝については、全掘する時間を確保できなかつたため、基礎工事の影響が及ばない深度以下については地下に現状保存することになった。発掘調査は平成29年6月22日に終了した。資料整理および報告書作成は、平成31年度（令和元年度）に資料整理を行い、令和2年3月に報告書を刊行することになった。

また、当該調査に関する基本情報は下記表のとおりである。

<調査基本情報>

| | | | | | |
|-------|------------------------------------|---------|-------------------|--------|-------------------|
| 遺跡名 | 那珂遺跡群 | 調査次数 | 170 次 | 調査略号 | NAK-170 |
| 調査番号 | 1704 | 分布地図図幅名 | 023 雀居 | 遺跡登録番号 | 401320085 |
| 申請地面積 | 250m ² | 調査対象面積 | 250m ² | 調査面積 | 262m ² |
| 調査期間 | 平成 29 (2017) 年 4 月 25 日 ~ 6 月 22 日 | | | 事前審査番号 | 28-1-77 |
| 調査地 | 福岡市博多区那珂3丁目10番1号那珂小学校地内 | | | | |

2. 調査の組織

・調査委託：こども未来局

・調査主体：福岡市教育委員会

（発掘調査 平成29年度： 資料整理・報告書作成 平成31・令和元年度）

・発掘調査および整理・報告総括

経済観光文化局文化財部（平成28・29年度）・文化財活用部（令和元年度）

埋蔵文化財課 課長 常松幹雄（平成28・29年度）、菅波正人（令和元年度）

埋蔵文化財課調査第2係長 大塚紀宣

・事前審査

埋蔵文化財課事前審査係 吉田大輔（平成28・29年度）、中尾祐太・松崎友理（令和元年度）

・発掘調査および整理・報告庶務

文化財保護課（平成28年度）・文化財活用課（令和元年度）管理調整係 松原加奈枝

・発掘調査および整理・報告担当

埋蔵文化財課調査第2係 久住猛雄

3. 周辺の地理的歴史的環境

那珂遺跡群は、福岡平野の中央や北側にあり、那珂川と御笠川・諸岡川に挟まれた中位段丘上に立地する（Fig. 1）。南方の春日丘陵から北に延びる段丘は、那珂の南側に接する五十川遺跡付近で狭くなるが、北に続く那珂遺跡群では段丘の幅が広くなる。北側に接する比恵遺跡群や、南側の五十川遺跡とは連続的な分布にあり、同一段丘上に立地する。特に比恵遺跡群は、那珂との間に鞍部（浅い谷状地形）があるが、遺構分布や遺構変遷の様相から、弥生時代から古代においては実質的に同一の遺跡群と捉えられ、「比恵・那珂遺跡群」とも総称されている（田崎博之1998ほか）。また、比恵の東側に隣接する山王遺跡も、丘陵鞍部を挟むが、段丘は連続しており、特に弥生時代から古墳・飛鳥時代までの遺構展開が一連の動態であり、山王遺跡も含めて「比恵・那珂遺跡群」と総称してもよい。行政上の「周知の埋蔵文化財包蔵地」の便宜的区分を越えて同一の「遺跡群」として把握することが肝要である。この範囲は、かつて中山平次郎が、すでに大正年間に、「博多湾沿岸地方の遺跡としては、筑紫都住吉村平田、同郡那珂村竹下及那珂付近から、北方に向って那珂村東光寺を経て、堅粕村比恵の南方に達する地域の遺跡が最も大きいのであって、他にこれ程の広き遺跡を見出しえぬ」「随て私は最古の那津の都市といふべきものは、上述の竹下以北比恵南方に至る十二三町の地域で無くてはならぬと考へて居る」と指摘した地域にまさにあたる（中山平次郎1925）。中山平次郎が遺跡分布を遺物の表面採集によって推定した時代（大正年間）には、旧地形もまだよく残り、上述の範囲で遺物がかなり採集でき、かつ遺構もよく残っていたようである。しかし比恵・那珂遺跡群（以下、「比恵・那珂」とする）の現状は、中世以降（特に中世末以降）の開墾や屋敷地（城館）の造成により古代以前の遺構群が一部削平され、さらに近現代の区画整理（特に「駅南地区」の比恵遺跡群が顕著である）や都市化による地形の変更・削平が著しく、遺構の残存状況は必ずしも良好ではない場合が多い。しかしながら、地点によっては多くの遺構が密集して遺存していることもある。周間に比べて地形が高く残る土地や、逆に旧地形が低く削平度が少ない場合など、遺構の著しい重複によって遺構の平面プランが不明瞭かつ遺構の認識・検出が困難となり、「包含層」状になっている場合も少なくない。また削平された場所でも、開墾耕作により二次的な「包含層」が遺構検出面の上に堆積して広がっている場合もある。これらは、確認（試掘）調査や本調査の遺構検出時においての要注意事項である。比恵・那珂の標高は、地形の削平部分も考慮すると最高所が12m前後、低いところで5m前後であり、一定の起伏がある。比恵・那珂の範囲は、南北2.4km、東西0.5kmから最大1.0kmの100ha以上に及び、特に弥生時代～古墳時代、飛鳥時代の遺跡としては全国的にも最大規模の部類に入る。さらに、弥生時代中期後半から古墳時代前期前半の集落の様相は、比恵・那珂における小規模調査を含む多くの調査の累積により（2020年1月現在、比恵は156次、那珂は178次、山王は15次までの調査がなされている）、遺構密度や環溝・区画溝・条溝・「道路」遺構により「街区」状に区画される状況、井戸遺構の集中などから、中山平次郎が予測した「那津最古の都市」を証明するに至っている（久住猛雄1999・2003・2008・2009・2019、南秀雄2018）。

比恵・那珂では、弥生時代早期（「弥生土器」期）の那珂の二重環濠集落（那珂37次ほか）より本格的な集落遺跡が形成される。弥生時代早期から中期前半（須玖I式前半）までは、比恵・那珂の段丘縁辺部にいくつかの集落や墓地が形成されたことが判明している。しかし弥生時代中期前半～

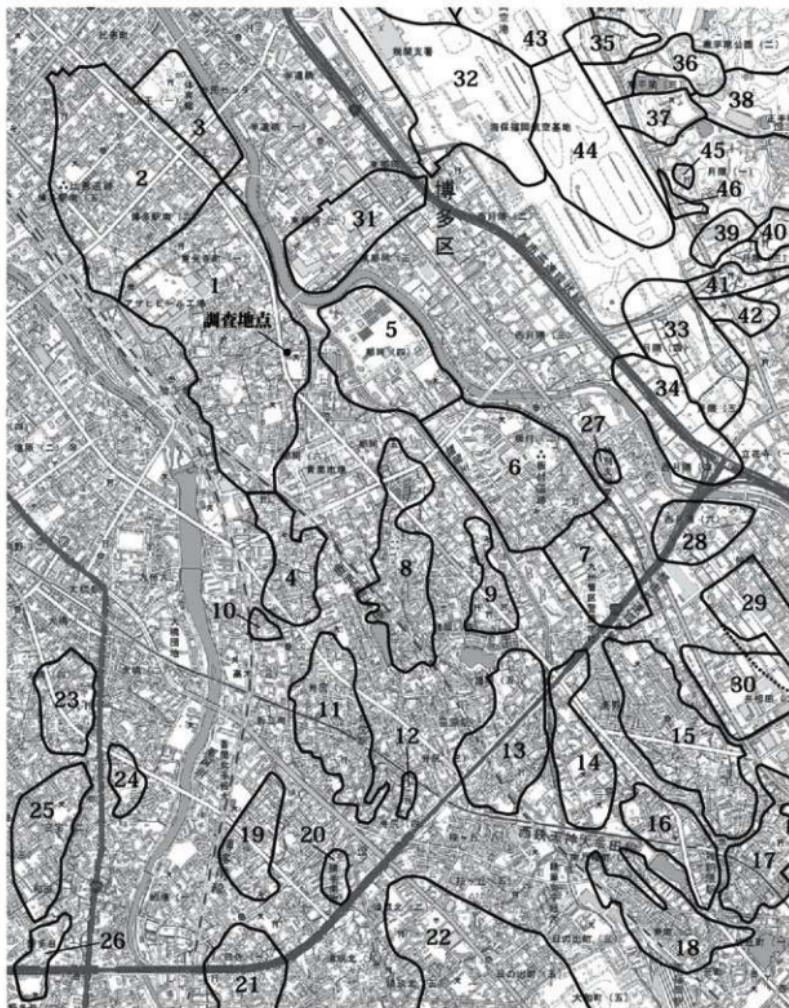


Fig.1 那珂遺跡群の範囲と周辺遺跡分布図 (1/25,000)

(注: 道路(周知の埋蔵文化財包蔵地)の範囲は変動がありうる。開発工事などに際しての最新の情報は、福岡市埋蔵文化財課事前審査係で確認されたい。)

1. 那珂遺跡群
2. 比恵遺跡群
3. 山王遺跡
4. 五十川遺跡
5. 那珂君体遺跡
6. 板付遺跡
7. 高畠遺跡
8. 諸岡A遺跡
9. 諸岡B遺跡
10. 井尻A遺跡
11. 井尻B遺跡
12. 井尻C遺跡
13. 笹原遺跡
14. 三筑遺跡
15. 野坂A遺跡
16. 野坂B遺跡
17. 野坂C遺跡
18. 南八幡遺跡
19. 横手遺跡群
20. 寺島遺跡
21. 佐道跡
22. 猪塚・岡本遺跡
23. 大橋E遺跡
24. 三宅B遺跡
25. 三宅C遺跡
26. 野多目A遺跡群
27. 板付東遺跡
28. 井相田D遺跡
29. 仲島遺跡
30. 井相田C遺跡
31. 東那珂遺跡
32. 雀屋遺跡
33. 下月隈C遺跡
34. 立花B遺跡
35. 久保園遺跡
36. 斎田大谷遺跡
37. 宝満尾遺跡
38. 宝満尾東遺跡
39. 天神森遺跡群
40. 下月隈A遺跡群
41. 下月隈B遺跡群
42. 上月隈遺跡群
43. 斎田平尾遺跡
44. 下月隈D遺跡
45. 扇塚遺跡
46. 下月隈C遺跡
- 170次調査地点

中頃（須玖Ⅰ式期）にかけて、まず比恵や山王の段丘中央部に集落や墓地が形成され始め、続いて那珂の段丘中央部に中期中葉から後葉（須玖Ⅰ式後半～須玖Ⅱ式前半）にかけて集落や墓地が形成される。井戸の掘削も、山王で中期前葉（須玖Ⅰ式前半）のものがあり（山王10次）、比恵では須玖Ⅰ式後半から、那珂でも須玖Ⅰ式後半から（本報告那珂170次など）開始される。井戸の掘削数の増加は、段丘中央における「集住」の根拠となる重要な事象で、比恵・那珂では中期後葉（須玖Ⅱ式前半）から中期末（須玖Ⅱ式後半）にかけて爆発的に井戸掘削数が増加し、人口が増加し、人口密度も増えたと推定される（久住・久住2008）。実際に、堅穴住居や掘立柱建物などの居住遺構もこの時期に急増する。居住遺構が濃密化する中期後半（須玖Ⅱ式期）には、八女粘土層以下までも深く掘削する井戸も出現し、井戸の造営数は北部九州の同時期の遺跡では突出して最大多数であり、その状況は古墳前期前半まで継続する。比恵・那珂における井戸址の集中は特異であり、水場に乏しい段丘上における極度の「集住」がその築造の背景にあろう。さらに中期中頃から中期後葉にかけては、比恵・那珂全域で、「条溝」や「大溝」の掘削が開始され、弥生時代後期にかけて直線的な大溝・条溝や方形を指向する「環溝」が段丘上を区画し、通常の集落の構造とは一線を画する。弥生中期の墓地は複数箇所で確認できるが、比恵6次周囲の墓群は埴丘墓を形成し（吉留秀敏1989）、中期前半の壺棺からは細形銅劍が出土した。後期になると墓地遺構は不明確となるが、井戸、堅穴住居、掘立柱建物、溝などの遺構は間断なく営まれる。後期初頭以降の井戸数の増加を考慮するとむしろ集落の人口密度は増大したと考えられる。後期初頭以降には比恵中央東部に「1号環溝」が造営され、以後、「3号環溝」「2号環溝」と続く（比恵139次報告参照）。さらに片側ないし両側に側溝を備える「道路」的な帶状空間が少なくとも中期末には出現し、条溝、環溝とともに広大な集落内を機能的あるいは階層的に区画することが開始され、以後「街区」化して「都市」的様相を呈していく。弥生時代の比恵・那珂は、銅鏡副葬等の厚葬墓や青銅器埋納遺構が現状見られず、それらが存在する福岡平野のもう一つの弥生時代巨大遺跡群である須玖岡本遺跡群（春日市）と比較して、政治・祭祀的センター性に乏しい（久住猛雄2000）。しかし、高床倉庫域と考えられる広域の掘立柱建物卓越地区の存在（比恵中央北部）や、朝鮮半島系（粘土帶土器、三韓土器、樂浪土器）や列島内各地の広範囲の外來系搬入土器の継続的存在などから、交易（経済）の一大拠点としての性格が考えられる（久住2008、森本幹彦ほか2015）。長距離交易の一大拠点であったことは、水銀朱原料である辰砂（中国大陸原産）の一括出土（比恵57次・69次）や、中国戰国末期の「燕」ないし衛満朝鮮に由来する鑄造鉄斧の出土（比恵51次）、長方形または板状小型鉄素材の出土（比恵57・70・123・125・145次ほか）、中国南方～東南アジアに生産地が考えられるガラス（カリガラス）小玉（比恵6・145次、山王11次ほか）の多数出土やインド産とされる特異な赤褐色ガラス（ムチサラ）極細管玉（山王10次）の居住域での出土、基準重量での取引の存在を示す棹秤用の「石權」の出土（比恵125次、那珂113次）、北陸産小型管玉の出土（比恵145次）などからも伺える。弥生時代では、鉄器は弥生時代中期末までにかなり普及していた証拠があり、出土する中期後半以降の本製鋤は、80%前後が鉄製刃先装着用とされ、農具というより段丘上での掘削に使用する「土木具」が大半であった。そのほか青銅製鋤先が一遺跡での最多数の出土がある。比恵・那珂では青銅器・ガラス製品生産関係遺物も複数地点で出土し、須玖岡本遺跡群のような極度の集中性はないが、鋤型出土数では須玖岡本遺跡群に次いでいる。

弥生終末期になると、比恵・那珂は再編成期を迎える。集落再編の軸として、先行する複数の「道路」状空間を直線的に結ぶように、比恵遺跡群中央北西部から那珂遺跡群中央部まで貫く延長1.5km以上の両側側溝を備えた「道路（メインストリート）」が造営され、それと同じ方位で一辺70mと大型化する「2号環溝」が掘削される（久住1999・2008）。後者は「王」の居館と推測され、その成立直



後の古墳時代早期（弥生終末期後半）には、九州最古の前方後円墳である那珂八幡古墳（全長約86mと最近の那珂175次で判明した）が那珂中央部に築造される。当初の「道路」の終点は那珂八幡付近とみられるが、その後古墳初頭にさらに南側に延伸され、その両側に前方後方形を含む古墳前期の小古墳群が次々と造営されている。「道路」の北側はこれまで不明確であったが、近年の調査（比恵127・132・143次）から比恵中央段丘北西部で緩やかに北に曲がることが判明し、試掘調査の諸成果と合わせ、比恵北部を横断する「水路」が湾入すると推定される箇所に向かって延びると推定される。この湾入部分は、今後「船着場」遺構が検出される可能性がある。さらに比恵南西部でも西から谷部が湾入した場所上に「道路」推定線が来るが（比恵141次南）、この谷部でも「船着場」（比恵141次の湧水する落ち込みには木櫻が出土）や「橋」が検出する可能性もある。なお近年、主に古墳初頭前後に帰属する「板石硯・研石」が比恵・那珂で複数出土しているが（比恵140・141・143・144次、那珂113・170次、山王13・14次、比恵57次に未成品）、そのうち2点が「メインストリート」沿いであることが注目される（比恵141・143次）。この比恵・那珂における「メインストリート」の造営途中、那珂八幡造営頃に、奴国の「主都」とも言われる春日市須玖岡本遺跡群は衰退し、青銅器工房群が途絶え、遺構も激減する。比恵・那珂に奴国の「主都」が遷ったらしい。比恵・那珂には那珂八幡だけでなく、弥生終末期古相に推定一辺20m前後の方形墓があり（比恵120次周間推定）、これに接し「道路」沿いに終末期新相の推定全長36mの前方後方墳があり（36・55次）、さらに比恵中央部には弥生中期墳丘墓に接して、終末期新相成立の一辺30m以上の比恵1号墳がある（6・16・89次）。那珂八幡古墳南方には、「道路」が古墳時代初頭に延伸され、「道路」両側の居住域は他へ移転し、全長30m級の前方後方墳を含む小古墳群（「方形周溝墓」群）が、古墳前期中頃まで「道路」両側に形成される。さらに那珂八幡古墳の北側では、「道路」側に前方部を想定すると、那珂八幡の1/2サイズの小型前方後円墳が築造された可能性がある（那珂171次の円形周溝）。比恵1号墳とそれに接する比恵2号墳（古墳初頭）の周溝には、西日本各地と朝鮮半島系土器（楽浪、馬韓）があり、交易を司る被葬者が考えられる。この周囲は漁撈具が多く出る地区であり海上活動の指導者であろう。比恵墳丘墓・1号墳を取り巻くように「倉庫城」があることも注意される。比恵・那珂の居住域は、「メインストリート（道路）」や「2号環溝」の造営により諸施設の方位が同じ方向を指向し、また墳墓域の再設定により居住域に変動があるなど「区画整理」が進むが、古墳時代前期前半までは集落規模と遺構分布は保持される。ところが古墳前期後半には遺構が激減し、その後中期初頭から中期末までの遺構の分布は非常に疎らでごく僅かとなる。ただし古墳時代前期中頃から前期末にかけては、「2号環溝」が「首長居館」として維持し、その周囲だけは遺構群が存続し、朝鮮半島系の陶質土器なども搬入されることも判明しており、福岡平野の最高首長の「居館」が継続していたらしい（久住2019）。

その後、古墳時代後期以降に比恵・那珂の拠点化が再開される。この時期から飛鳥時代の詳しい説明は他に譲るが、古墳後期中頃（TK10期：6世紀第2四半期）の三重周溝を巡らす全長75mの東光寺劍塚古墳築造後の、三重欄列+大型倉庫群（比恵109・125次→8・72次、39次）を嚆矢とする「那津官家」に関わる比恵・那珂の初期官衙関連遺構群の展開は、再び「都市」的様相を呈し、飛鳥時代前半までは、かつての「メインストリート」が再利用されて主要遺構が再配置されていることが判明してきたことが特筆される（菅波正人2012、南秀雄2018）。

参考文献>久住愛子・久住猛雄 2008「九州I－福岡県下における弥生時代から古墳時代前期の井戸について－」『井戸再考』第57回埋蔵文化財研究集会資料集／久住猛雄 1999a「弥生時代終末期「道路」の成立」『九州考古学』74、九州考古学会／久住猛雄 2000「奴国の遺蹟－須玖・岡本遺跡群と比恵・那珂遺跡群－」「考古學から見た弁・辰韓と倭」九州・嶺南考古学会第四回合同大会／久住猛雄 2003「北部九州における弥生時代の特定環構区画と大型建物の展開」『日本考古学協会2003年



Fig.3 那珂170次調査の位置と周辺の調査地点（2）（1/1,000）
 （注：95次調査の位置は報告の座標が間違っている可能性があり、敷地で合わせた。）

度遺賀大会資料集》／久住猛雄 2008「福岡平野・比恵・郡河遺跡群—列島における最古の『都市』—」『弥生時代の考古学』8、集落からむよ弥生社会、同成社／久住猛雄 2009「比恵・郡河遺跡群—弥生時代後期の集落動態を中心として—」『弥生時代後期の社会変化』第58回埋蔵文化財研究会資料集／久住猛雄 2019「筑前西部～中部（糸島・早良・福岡平野周辺・槽屋南部・二日市地峠北半）の弥生時代終末期から古墳時代前期の集落・集落動態・首長居館・交易拠点」『集落と古墳の動態—古墳時代前期末～古墳時代中期—追加資料』第22回九州前方後円墳研究会宮崎大会追加資料／菅波正人 2012「博多湾岸のミヤケ開拓遺跡」『日本考古学会2012年度福岡大会研究発表資料集』／田崎博之 1988「福岡地方における弥生時代の土地環境の利用と開発」『福岡平野の古環境と道路立地』九州大学出版会／中山平次郎 1925「古代の博多（一）」「考古学雑誌』第16巻第6号／南秀雄 2018「上町台地の都市化と博多湾岸の比較—ミヤケとの関連」『大阪文化財研究所 研究紀要』第19号／森本幹彦ほか 2015「新・奴国展」福岡市博物館特別展示図録／吉留秀敏 1989「比恵遺跡群の弥生時代墳丘墓—北部九州における弥生時代区画図の一例—」『九州考古学』63

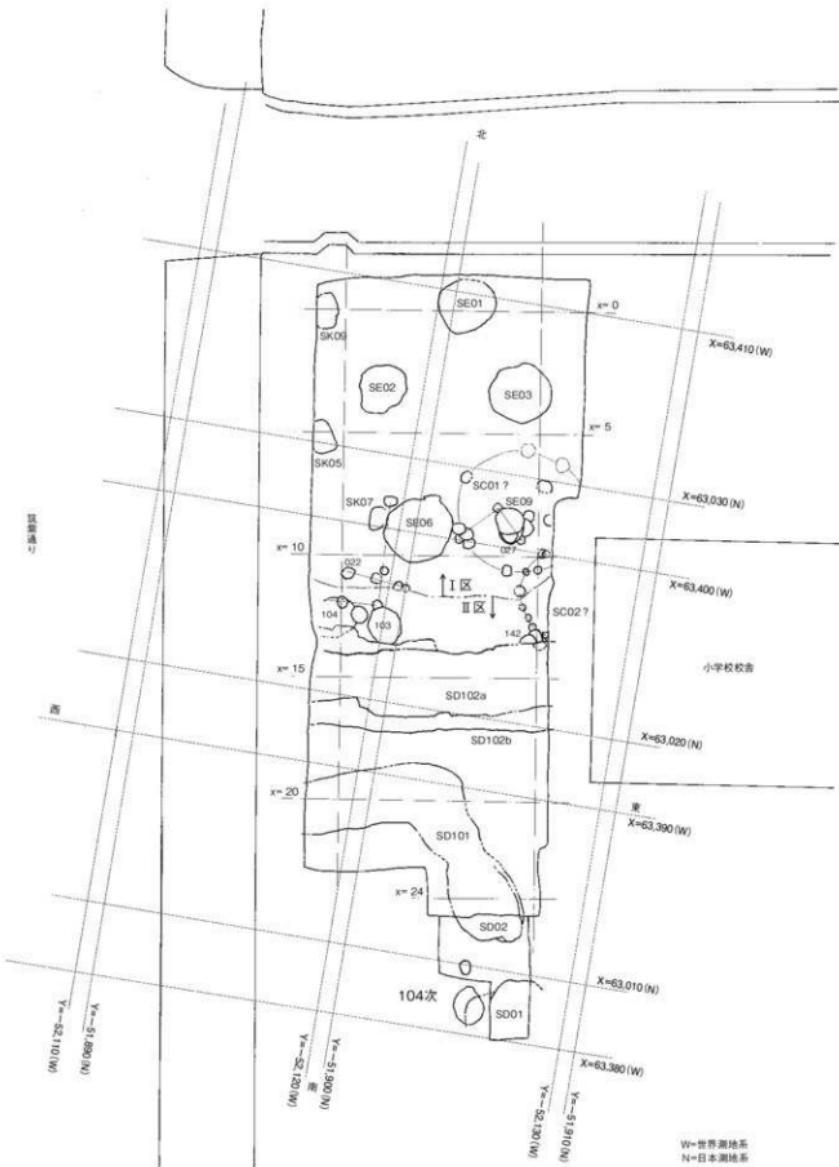


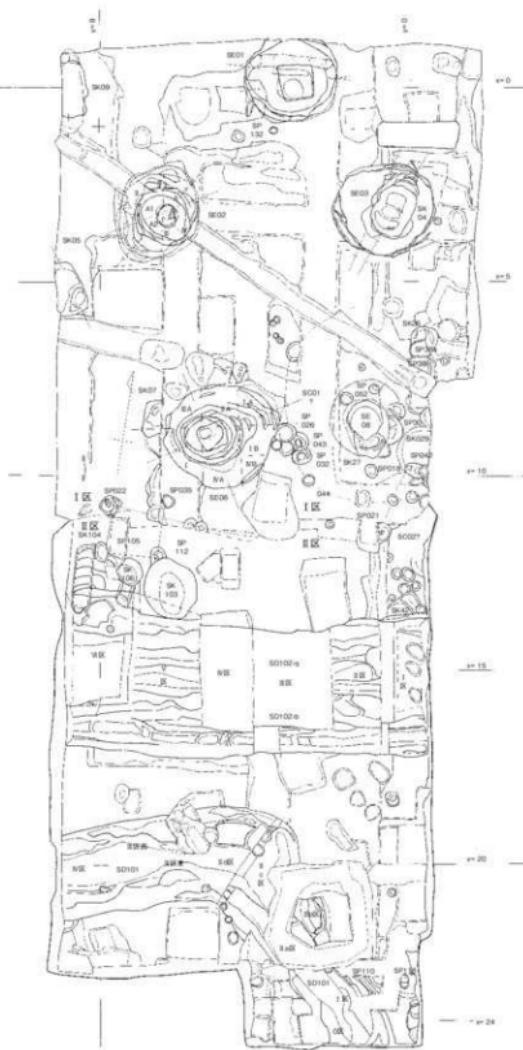
Fig.4 那珂170次調査区全体図（1）（1/200）

4. 那珂170次の周辺の調査

(Fig2・3)

那珂39次 那珂170次の北西60mの調査区（福岡市埋蔵文化財調査報告書第1259集：以下「市報〇〇〇」とする）。弥生時代前期後半の貯藏穴、弥生中期の壺棺（中期前半の成人棺と中期後半の小児棺）、古墳時代前半の環溝、中世の土壙墓と地下式などが検出されている。古墳前期前半の溝はII期（弥生時代終末期～古墳時代前期の土器編年は、久住1999b-2017に掲る）の土器があり、底部焼成前穿孔二重口縁壺の出土から墳墓の溝にも見えるが、この溝は那珂5次の弧状溝と繋がり、東西25m×南北34mの隅丸長方形の「環溝」になると思われ（Fig.3）、墳墓ではない祭祀（葬送儀礼？）の場とするのが妥当だろう。環溝内に伴う建物は無いらしい。周囲には、5・39次の環溝の北東170mには那珂109・112次の方形周溝墓群、また南東65mには104・170次の方形周溝墓があり、これらに関わる施設とも考えられる。また環溝は北西に陸橋があり、さらに南西側では重複があり掘り直しが考えられる。

那珂5次 170次の北西45mの調査区（福岡市埋蔵文化財年報Vol.27：以下「年報〇〇〇」とする）。39次の南側。北側を閉むような弧状溝が検出されているが、39次の溝と繋がる環溝である。溝下層の一部に「一括土器」が出土しているが、時期は混在しており（II A～II C期）、複数回の祭祀の結果



と考えられる。39次の同時期の溝と同様に二重口縁壺が多く、墳墓祭祀と共通する土器組成である。

那珂40次 筑紫通りを挟んだ西側28mの調査区（市報367集）。遺構が濃密に検出された。弥生中期後半（須玖II式前半）の堅穴住居SC04、中期末（須玖II式後半）の貯蔵穴、推定弥生中期～後期の掘立柱建物、SC05は終末期前半（I A期）、SC16は終末期後半（I B期）、SC15は古墳時代初頭（II A期）の堅穴住居群が続く。また飛鳥時代前期（須恵器IV期）の堅穴住居、掘立柱建物、溝、中世の大溝、土壙墓がある。中世の南北大溝は170次の東西大溝SD102と連関する可能性もある。

那珂7次 170次の東北東80mの調査区。遺構が濃密に検出された。まず弥生中期初頭と中期後半の柱穴があり、堅穴住居や掘立柱建物の存在が考えられる。次に弥生終末期の堅穴住居と壠棺がある。次に古墳後期末（須恵器III期）～飛鳥時代前期（IV期）の堅穴住居とおそらく一部の掘立柱建物があり、一時期空白があり、奈良時代から平安時代初期の掘立柱建物群が続いている。遺構の分布から、当時の段丘はさらに東へ延びていたのではないかとも推定されている。

那珂104次 170次の南側に接する調査区で、一部重複する。170次SD101の続きであるSD02と陸橋をおいてSD01が検出されている。方形周溝墓の周溝である（年報VOL.19）。出土土器にはII B期の二重口縁壺（31頁Ph.3）や布留系壺があり方形周溝墓の時期を示すが、弥生土器も混入している。

那珂95次 170次の南東58mの調査区（年報VOL.19）。古墳後期～飛鳥時代の掘立柱建物と溝などがある。なお報告の調査区の国土座標がずれている可能性があり、今回は敷地との関係から調査区を地図に入れ込んだ（Fig.33）。

那珂113次 170次の南東95mにある調査区（市報982集）。東側から西側に入り込む谷頭が検出されていて、下層に弥生早期～中期までの遺物が、上層に弥生中期後半、弥生終末期～古墳前期前半、古墳時代後期～飛鳥時代前期、奈良時代初頭までの遺物が含まれる。谷部の弥生終末期前後の土層からはベニバナ類の花粉が検出されている。その他下層の石製品に、略円筒状の「石権」（分銅）が3点検出されたほか（報告Fig.15-s8.s9.s15：輪内達2018）、「砥石」として報告されている中に「板石硯」がある（報告Fig.15-s5）。谷部落ち際にには弥生中期末（SK06）、後期初頭（SK05）の貯木土坑ないし井戸もある。その他、柱穴群から弥生時代～古墳時代前期、古墳後期～飛鳥時代、中世の掘立柱建物があつたらしい。板石硯と石権の出土が注目され、那珂170次でも板石硯があり、このエリアには弥生中期後半前後の交換・取引が行われた「市場」があった可能性もある。

参考文献>久住猛雄1999b「庄内式俳行期における北部九州の土器様相」「庄内式土器研究」XIX／久住猛雄2017「糸島・早良・福岡平野」「九州島における古式土師器」第19回九州前方後円墳研究会長崎大会／輪内達2018「比志・那珂遺跡出土遺物の再検討—弥生時代の九州の天秤権を考える—」「七隈史学会第20回大会研究発表報告集」

II. 調査の記録

1. 調査の概要

那珂170次調査地点は遺跡群東縁部中央に位置する（Fig.1・2）。周囲の標高は、東側が8.25～8.35m前後、西側が8.0～8.2m前後である。地表から近現代の盛土を除去すると、地山の鳥栖ロームがあらわれ、その上面で遺構を検出した。堅穴住居がほとんど残っていない点、貯蔵穴とみられる土坑が極めて浅い遺存であることを考慮すると、弥生時代の地表からは推定1m以上削平されていると考えられる。検出遺構は、弥生時代前期の貯蔵穴、弥生時代中期の井戸、古墳時代前期前半の方形周溝墓、中世前期の土坑・井戸、中世後期～近世初期の井戸・大溝（壕状遺構）などである（Fig.4・5）。ただし出土遺物から、弥生時代前期・中期・後期・終末期、古墳時代前期・後期、飛鳥時代の各時代の遺構がさらに多く存在したと考えられる。

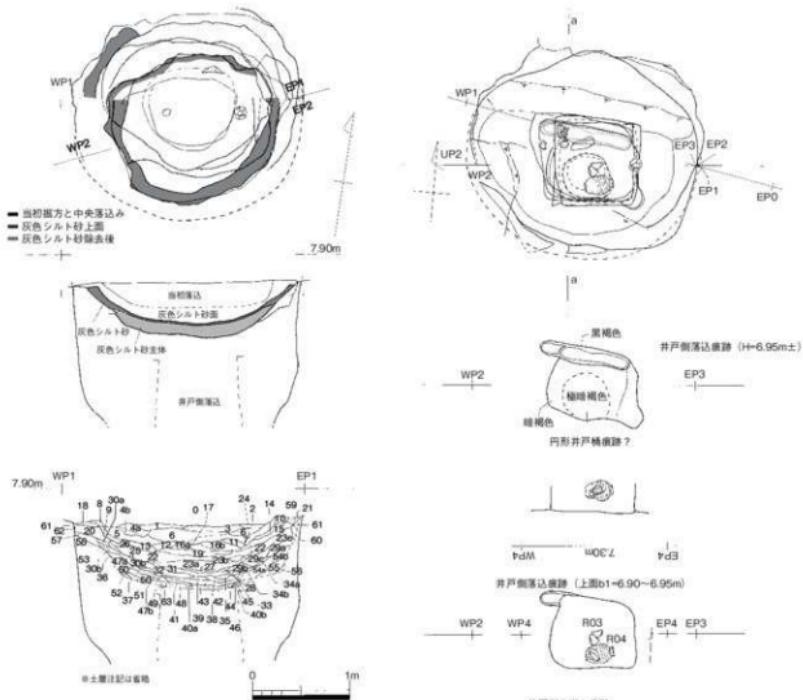


Fig.6 SE01 upper part actual measurement diagram・soil profile cross-section diagram (1/60)

古墳前期前半の方形周溝墓（小方墳）

SD101は南側隣接の104次調査南側の土坑状溝（SD02）から連続するもので（Fig.4・25）、本調査区で西側に屈曲してL字状になり（Fig.20）、方形周溝になることが確定した。下層から二重口縁壺など精製土器が多い土器群が検出され、周溝墓の供獻土器の転落である可能性が高い。104次調査とあわせて、104次の溝の途切れ（104次SD01とSD02の間）が周溝墓東側の陸橋部となるとみられ、規模は周溝下端で南北、東西ともに16.8m前後と推定できる。土器群は陸橋側の溝下層と溝屈曲部までが多い。井戸は1基のみ弥生時代中期中頃～後半（SE03：Fig.12・13）であるが（当初「素掘り」と考えたが、何らかの井戸側

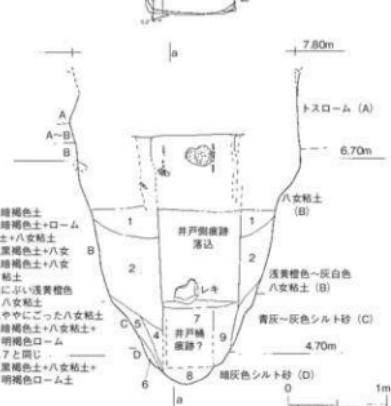


Fig.7 SE01 actual measurement diagram (1/60)

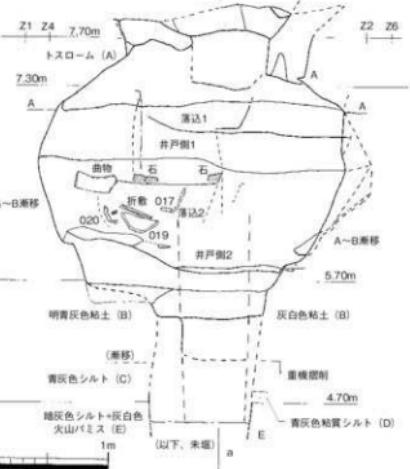
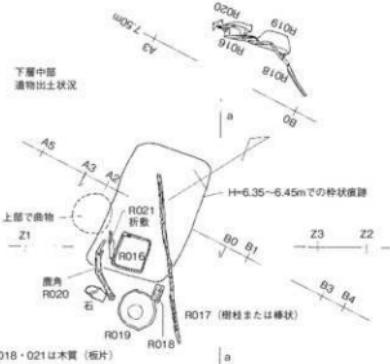
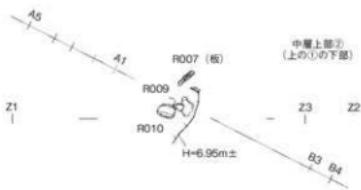
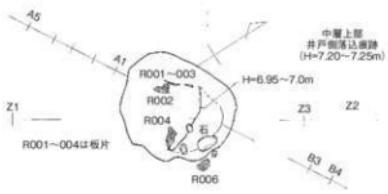
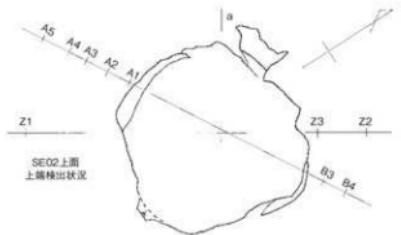


Fig.8 SE02上半実測図 (1/40)

Fig.8 SE02上半実測図 (1/40)

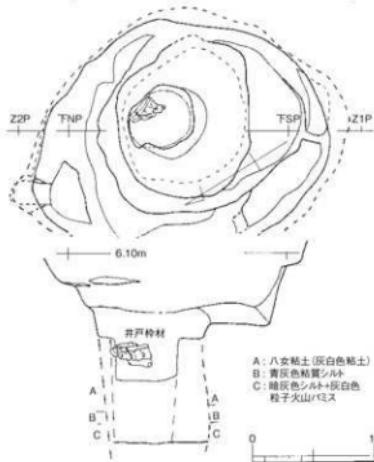


Fig.10 SE02下層下部井戸枠材出土状況図 (1/40)

住居の掘方や掘立柱建物跡は確実なものがない。ただし調査区中央東側で、円形住居（弥生中期？）の痕跡とみられる柱穴群が2か所あり（SC01,SC02; Fig.5）、また建物の痕跡の一部とみられる柱穴列もある。弥生時代早期（突帯文期）～前期は、前期前半の貯蔵穴2基（SK05,SK09）のみがあるが、遺物は早期からり削平された遺構の存在が予測され、比恵・那珂での弥生時代集落の展開が、段丘の縁辺部の複数個所で始まるというこれまでの傾向をさらに裏付けることになった。

出土遺物は、弥生土器（早期～終末期）、古墳時代前期の古式土師器、古墳時代後期～中世の土師器・須恵器、瓦器、瓦質土器、中世の輸入陶磁器・国産陶器のほか、中世の木製品や獸骨など有機質遺物、各時代の石器・石製品などがあり、出土総量はコレクタ計43箱である。遺構が不明確な弥生時代早期・後期、古墳時代後期～飛鳥時代、奈良時代前半までの土器も少なくなく、調査地が弥生時代から近世初頭にかけて、ほぼ絶え間なく集落の一部あるいは墳墓地として利用されたことが判明した。

なお中世末の溝SD102は全掘できなかったが、建設予定の建物基礎が一定深度以上に影響が及ばないことから、未掘部分は「現状保存」としている。

あった可能性がある）、他は中世前期から末期までの4基（SE01,SE02,SE06,SE08）である。中世のいずれも井戸枠の落込みや部材痕跡があり何らかの井戸側があったとみられ、中には木製品や骨角製品などの有機質遺物が遺存しているものもあった。井戸はいずれも検出面からの深さが3m前後で、比較的深く（本来の深さは4m以上になる）、最下部は八女粘土より下部の青灰色シルト砂層まで掘削されているものもあった。その他、SD102は中世末から近世初頭の東西に走る壕状の大溝で、一度埋没後に南縁部が幅狭く再掘削されている（Fig.27）。弥生時代の遺物（土器、石器）が中世の井戸や溝にも多く混入するが、削平のため豊穴

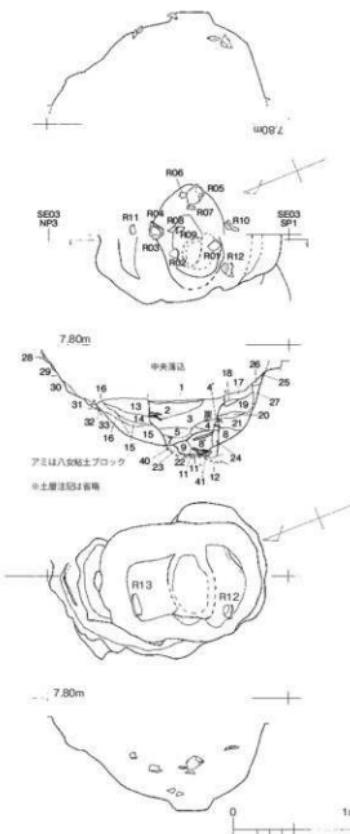


Fig.11 SX04 (SE03上部落ち込み) 実測図・土層図 (1/40)

また調査中には、那珂小学校6年生の授業の一環として、発掘調査の見学会が数度行われ、児童が郷土の歴史に触れることができ、好評を得たことを記しておきたい(Ph.1・2)。



Ph. 1 井戸遺構を見学する小学生



Ph.2 方形周溝墓を見学する小学生

で灰色シルト砂の面となる (Fig.1, PL.1-2)。この灰色シルト砂層を除去した深さ60 cm前後の面で、井戸側痕跡とみられる略方形の落込みが観察され (Fig.2、図頭版1-4)、これ以下は、推定井戸側落込み部分を先に掘削し、ある程度掘削したら外側を下

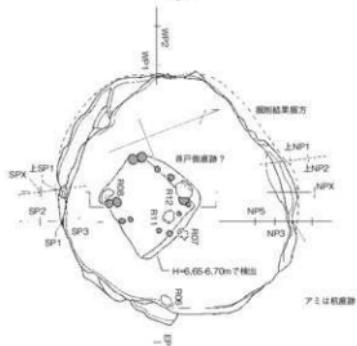
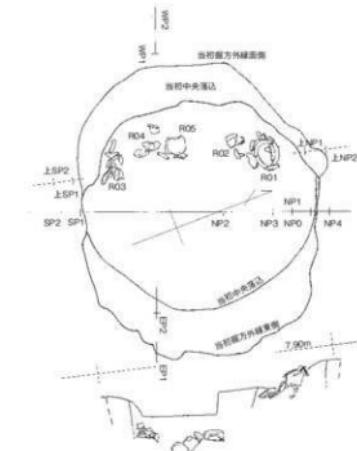
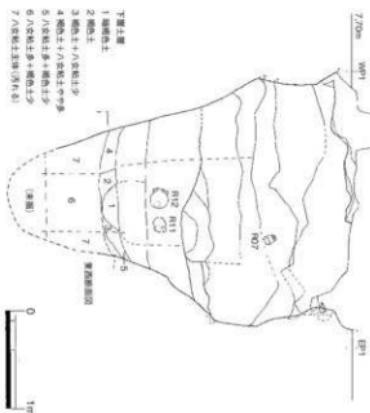


Fig.12 SE03上半実測図・東西断面図 (1/50)

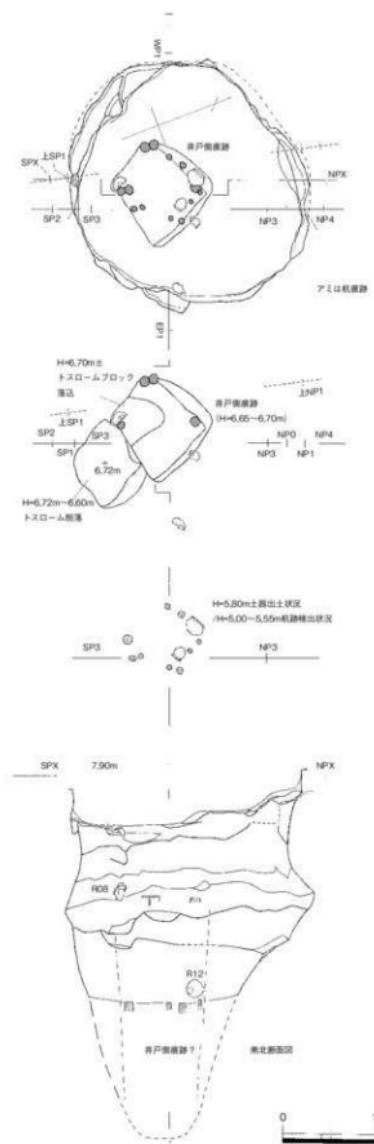


Fig.13 SE03中位以下実測図・南北断面図(1/50)

げていくという手順で掘り進めていった。なお他の井戸構造の掘り方も、中央付近に井戸側の落ち込みとみられる部分が観察された場合には、基本的に同じ手順で行っている。そのため、井戸側部分の堆積土(埋土)中遺物と、掘方埋土の各出土遺物は、およそ分離して取り上げることができていると考えられる。SE01では、深さ60cm強($H=6.95m\pm$)で井戸側の落ち込みを検出した(巻頭図版1-4)。逆に言うとこの上では井戸側の落ち込みは検出されず、これより上にあった井戸側は解体され部材が持ち去られたと考えられ、底面を灰色シルト砂で埋め立てた落ち込みの埋土は、井戸跡を埋めたときに沈みこまないための地業と考えられる。

略方形の井戸側落ち込みは(PL1-4~9)、上部では 70×80 cm前後の歪んだ方形をなすが、これは土圧で歪んだものともみられ、ある程度掘り進むと 80×85 cm強の正方形に近い形状で検出できる部分があり、これが本来の平面形で、また井戸側の枠板の厚さは、遺物出土状況などから、10センチ未満と推定される。なお方形枠板の隅角がどうなっていたかは部材が残らないので不明だが、部分的な土層の平面的相違からの確認によると、隅角は「T」字状の組み合わせであった可能性がある。また、これは部分的な確認であるが、方形枠板井戸側の内部に円形の落ち込みが見られた部分があり、円形桶組などの円形枠が内部にあった二重構造の井戸側だった可能性もある。その場合、内側の円形枠のみが、掘方が狭くなる深さ240cm前後以下、底面からあって、方形枠板側は、掘方が広くなる部分からあったとも推定できる。その方形枠板推定範囲の最下部付近に、大きな礫が投棄されており、「井戸封じ」の祭祀儀礼の痕跡と思われる。井戸の掘方の下部は八女粘土層を超えて灰色シルト砂層を大きく掘りこんでおり、湧水がかなり見込まれる井戸であったと考えられる。なお下部は重機を用いて確認している(PL1-10)。

井戸の時期は、出土遺物を参照すると(Fig.28~Fig.29-1~17)掘方出土最新遺物からは13世紀以降に掘削され、井戸側内最新遺物から14世紀前半頃までには廃棄され埋められたものと考えられる。

- SE02 (Fig.8~10、巻頭図版1-6, 2-1~3, PL1-11~14-2)

I区中央北西で検出。上面での径は南北130cm×東

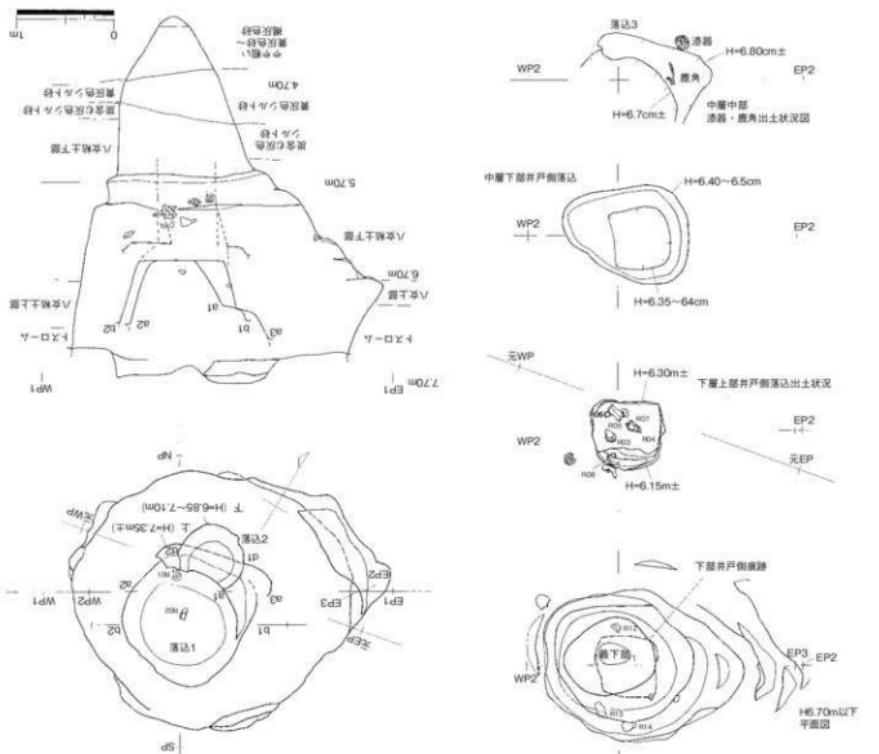


Fig.14 SE06実測図・南半見通し断面図 (1/50)

西115cmだが (PL1-11)、深さ130cm前後の湧水が上がってくる八女粘土中位上部において掘方壁が崩落して大きくオーバーハンギングしており、その部分では南北290cm×東西245cmの菱形に近い略楕円形となる (卷頭図版2-3)。また深さ240cm前後で掘方は略南北135cm×略東西100cm前後と狭くなる。深さは、上面から340cm前後までを機器で確認したが、以下は危険なため掘削を断念している。

井戸側と思われる落込みは深さ80cm前後でまず検出されたが (Fig.15断面図「落込1」、PL2-12)、略方形に確認されたのは深さ75cm前後 ($H=7.20m$ 前後) で (PL2-13、卷頭図版1-6)、

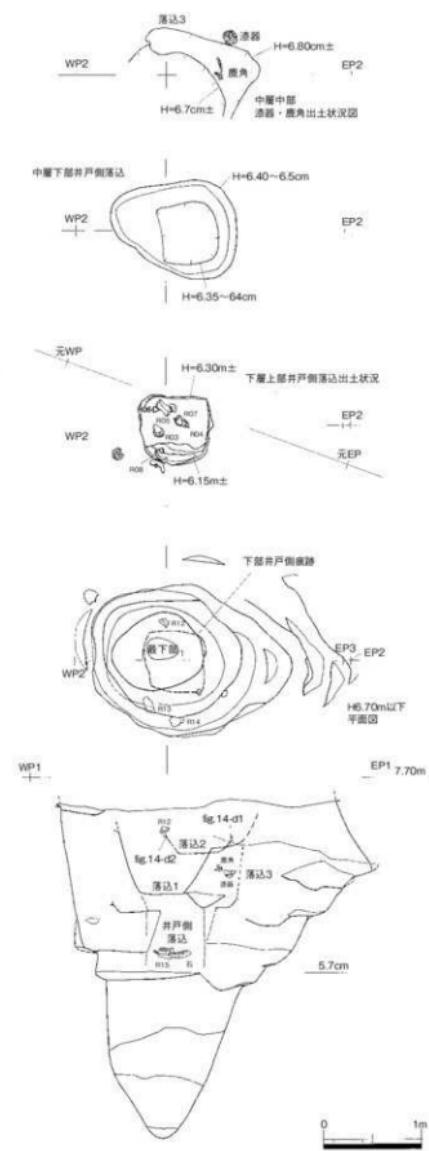


Fig.15 SE06中位以下実測図北半見通し断面図 (1/50)

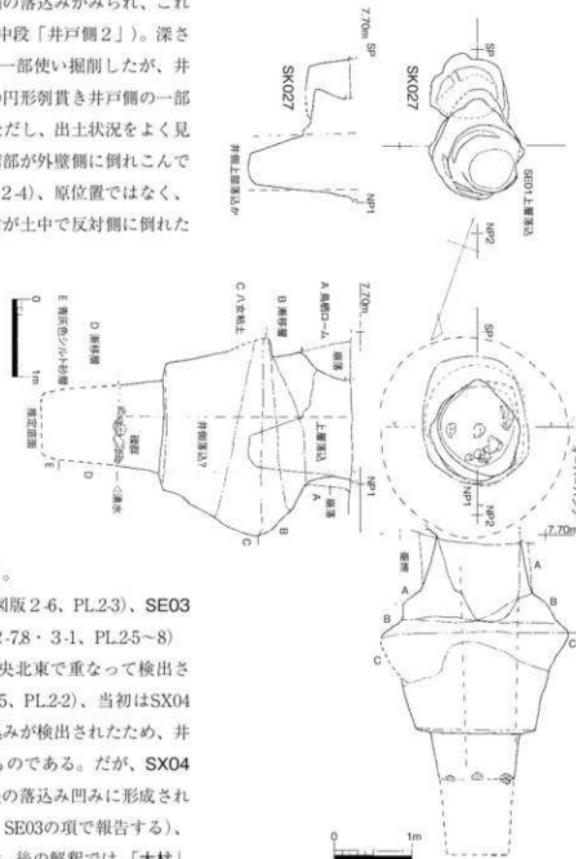
これがはっきりするのは深さ135cm前後(H=6.60m前後)で、土層の平面分布から、南北の東西枠板が東側に突出する方形枠と推定できた(Fig.14)。ところがこの少し下の深さ150cm以下になるとこの方形枠板痕跡が続かず(ちょうど掘方南西側に木製曲物と腐朽した木製品が据えられたレベル付近;卷頭図版2-1)、上部の井戸開口部と合わない掘方の南西側に偏った部分に長方形落込みが検出され、この内外に木製折敷や瓦質鉢、鹿角などが検出された(Fig.15上、PL.1-14.15、卷頭図版2-2)。亀甲2点もこの付近から出土しているようである。この長方形落込み(Fig.15の「落込2」)は、実際にはこれら遺物が廃棄された範囲を包含する面よりも一回り大きい落込みだった可能性がある。結論的に言えば、下半部の井戸側の廃棄に伴う祭祀に伴うもので、上部の井戸側(方形枠板痕跡)は、これら遺物群埋置後の新しい井戸側と解釈する。この高さ前後で大きく掘方がオーバーハングしているのは、湧水がこの時期、八女粘土層の途中でも多くあったためであり、上部に井戸側を設置しても井戸としては機能したものと判断する。さて「落込2」の遺物廃棄層を掘削すると、深さ180cm前後から掘方中央に新たに井戸側の落込みがみられ、これは略円形である(Fig.15中段「井戸側2」)。深さ250cm前後からは重機も一部使い掘削したが、井戸側落込み内に、木製の円形刃貫き井戸側の一部を検出した(Fig.10)。ただし、出土状況をよく見ると、刃貫き部材の内溝部が外壁側に倒れこんでおり(PL.2-1、卷頭図版2-4)、原位置ではなく、腐朽を免れ遺存した部材が土中で反対側に倒れたものと解釈する。

なお上層出土の遺物は、平面位置で区分けして取り上げている(Fig.5)。

遺構の時期は出土遺物(Fig.29-18~30、30-1~8.13)から、14世紀頃掘削、15世紀前半頃までに廃棄、埋め立てられたものであろう。

- ・SX04 (Fig.11、卷頭図版2-6、PL.2.3)、SE03 (Fig.12-13、卷頭図版2-7.8・3-1、PL.25~8)

SX04とSE03はI区中央北東で重なって検出され(Fig.5、卷頭図版2-5、PL.2.2)、当初はSX04の中央にも井戸側状落込みが検出されたため、井戸の切り合いと考えたものである。だが、SX04(SK04)は、SX03中央の落込み凹みに形成された別の土坑で(便宜上、SE03の項で報告する)、井戸側と考えた落込みは、後の解釈では、「大柱」遺構痕跡ではないかと考えている。SX04は南北



178cm×東西126cmの楕円形土坑状遺構（掘方）で、中央の落込みがある。南北60cm×東西80cmの中央部分は「大柱」の抜き跡と考える。遺構の深さは80cm前後だが、底面は下部のSE03と分かれ難く不明確な箇所もあった。遺構の時期は出土遺物（Fig.30-14～21、Fig.31、Fig.32-1～6）から弥生時代中期後半、須玖Ⅱ式前半だが、次のSE03に比べて須玖Ⅱ式後半に近い時期である。

SE03は、上面での径が南北210cm×東西230cmだが^a、東西側、特に西側の検出面での掘方痕跡は極めて浅く消え（このレベルで段状になっていたとみられるが）、掘削後には径200cmの不整円形となつた。最上面から130～150cmの深さで100～130cmの深さでオーバーハングがあるが、壁面の一部は意図的に足場を作ったような掘り込みもある。これ以下の深さは径が狹まる。下部は深さ230cmまで人力で掘削、以下は深さ270cmまで重機で掘削したが、底面までは確認できなかった。ただし、ピンホールで突いて、最下部に完形土器群がなさそうなことまでは確認している。最下層の土層（Fig.12、巻頭図版3-1）や、一部は深さ120cmで、多くは深さ210cm前後で確認した杭状痕の並びや、下層上部で確認している略方形の落ち込み痕跡（巻頭図版2-8、PL2-7）から、この井戸は素掘ではなく、杭と矢板状のものを組み合わせるような井戸側施設があった可能性が高い。中央落ち込みは深さ100cm前後から不明瞭だったので、中央部出土土器と周囲（掘方）出土土器は分けている。上層の西側で土器群が出土したが、縁辺部であり、中央の円弧の縁辺に沿うように出土しており、掘方出土土器の可能性がある（巻頭図版2-7、PL2-5,6）。杭と板材を組み合わせた木製方形井戸側（井戸枠）は、実は中期中頃までの井戸には北部九州では佐賀平野を中心多くみられるもので（渡部芳久2008）、SE03も主要な時期幅は須玖Ⅱ式前半であるので、こうした例が参考になる。遺構の時期は出土遺物（Fig.32-3～24、Fig.33、Fig.34-1～19）から、掘削時期は上層西側縁辺部土器群（Fig.32-15～22、Fig.33-1,2）が掘方出土すると須玖Ⅱ式前半（田崎博之1985の「須玖Ⅱ式古段階」）でも須玖Ⅱ式後半に近い様相にあたりその時期が考えられるが、重機掘削の最下層土器群（Fig.34-13～19）は須玖Ⅰ式後半（田崎1985「須玖Ⅰ式新段階」）の様相があり上部土器群とは時期差がありそうなので、井戸の再掘削ないし井戸側の再構築の可能性がある。ただしいずれにしても廃棄時期は上部のSX04の時期である須玖Ⅱ式前半の幅内である。

文献>渡部芳久2008「九州Ⅱ」「井戸再考～弥生時代から古墳時代前期を対象として～」第57回埋蔵文化財研究集会発表要旨集／田崎博之1985「須玖式土器の再検討」「史潤」第122輯

・SE06（Fig.15,16、巻頭図版3-2～8、裏表紙下半写真）

I区南側中央で検出した。検出時は、基礎攪乱の合間の中央部が南北に高く遺存していた（巻頭図版3-2）。この状態をもとに上部は区分けして（Fig.5）、上層遺物を上げている。上面での径は南北264cm×東西326cmの略楕円形、深さは最上面から375cm前後である。掘方は、下半の深さ220cm付近ですばり、下部は八女粘土より下の灰色シルト砂層まで掘り込んでいる。東側のみ深さ100cm付近でオーバーハングしているが、これは湧水のためというよりは、この付近の下方のみが数段のステップ状になる掘方のため、井戸側構築のための何らかの足場設置のための故意の掘り込みとも考えられる。掘削の順序に沿って見ていくと、深さ45～60cmで井戸側の位置を示す円形の落ち込みが見えるが（「落込1」；Fig.14、PL2-9）、この際、途中で別々の小さく浅い落ち込みも見え（「落込2」；Fig.14）、上部は井戸側を解体して取り出した後に埋めたり、途中で何らかの理由で掘り込んだりした状況であろう。深さ100cm前後でも落込みが見え、この内外に漆器（赤・黒漆）と鹿角があった（「落込3」；Fig.15上段、巻頭図版3-34、PL2-10）。内外に分かれているので、漆器は井戸掘削・構築時の祭祀、鹿角は井戸廃棄時または再構築時（落込1と落込3が別時期の井戸側解体時とした場合）の祭祀であろう。井戸側痕跡が明瞭に見えるのは深さ140cm前後以下であり（Fig.15の上から2・3番目

の平面図、巻頭図版3-5.6、PL2-11,12)、略方形の井戸側(井戸枠)があったことが分かる。ただし井戸側部材は残らず、掘方が下半で狭くなってきたため、作業の都合上、下半部は井戸側部分と中央部を分けて掘ることができなかった。ただし最下部で、井戸側の一部に使ったと思われる横木状杭が検出された(PL2-13)。井戸側痕跡が確認できた最下部(深さ180~190cm)には、礪の集中廃棄があり、「井戸封じ」の祭祀と考えられる。また、この深さよりやや上部付近の掘方から、完形に復元できる(一部は井戸側内破片とも接合)弥生時代終末期の甕形土器が出土した(巻頭図版3-7)。

出土遺物 (Fig.34-20~23,Fig.35) は、中世後期) の遺物を含みながらも、弥生中期・後期・終末期、飛鳥時代、中世前半期 (12~14世紀前半) の遺物も多く含んでいる。井戸の掘削・廃棄時期は15世紀~16世紀前半前後とみられるが (Fig.35-7,8,11など)、遺構掘削時に多くの古い遺構を破壊したとみられ、特に完形に復元できる弥生時代終末期 (I B期) の壺の存在 (Fig.27-27) からは、その時期の井戸が重複していた可能性を想起させる。

• SE08 (Fig.16, PL.2-14,15)

I区南東で検出。SK27や、弥生時代の円形堅穴住居痕跡SC01を構成するピット群を切る。上面は略南北115cm×略東西100cmの菱形に近い不整楕円形で、下部が深さ100cm前後で大きくオーバーハンプして径210cm×190cmになり、掘削作業が危険なため途中で上部を掘り落して調査している。掘方は深さ200cm前後で以下が一回り小さくなる。上部が狭く危険なため、深さ245cm前後の疊群がある部分までを人力掘削とし、以下は重機で最下部を確認し、深さは320cm前後である。当初、上層途中から比較的掘りやすい円筒状に掘削できる落込みがあり、不明確だが円形井戸側（桶組など？）があった可能性がある。ただし途中から掘方が狭く、大きくオーバーハンプしているなど安全作業を優先し、掘方と井戸側を区別した掘削はできなかった。出土遺物には（Fig.36-1～10）、朝鮮陶磁や瓦質土器火鉢などがあり、16世紀頃の掘削～廃棄が考えられる。

(2) 土坑 (S K)

• SK05 (Fig.17、巻頭図版3-9、PL.3-1)

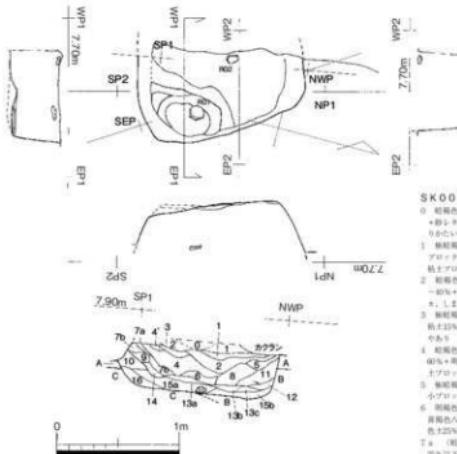


Fig.17 SK05実測図・土層図(1/40)

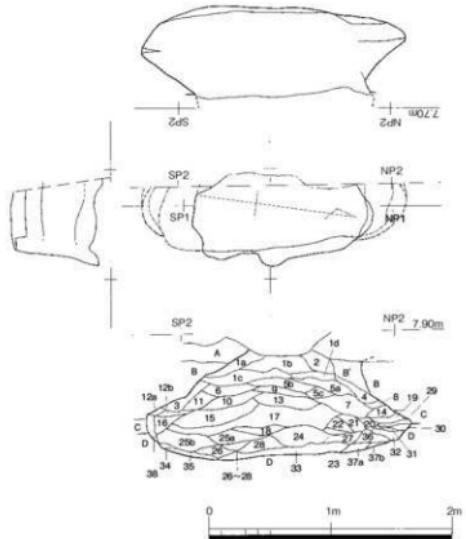


Fig.18 SK09実測図・土層図 (1/40)

I区西縁中央で検出した略長方形の土坑。遺構の約1/3は調査区外になる。略南北140cm、略東西90cm以上（推定110cm前後）、南辺が長く北辺が少し短い台形状平面か。深さは45cmの遺存。底面は南東側がわずかに高くなるがその中央が凹む。他は全体に平坦な底面。堆積は、最下部はレンズ状堆積のようだが、他は意図的に埋め戻したようにも見える。遺構の時期（弥生時代前期初頭）と、想定される本来の深さ（1m以上の削平が考えられる）から、袋状にならないタイプの貯蔵穴と考える。出土遺物（Fig.36-11～21）は、板付I式の良好な資料。意図的埋納ではない破片の流れ込みではあるが、一括性は比較的高い。壺に板付系が多く、甕に夜臼系が多い。詳細は遺物の項で少し触れたい。

・SK09 (Fig.18, 卷頭図版3-10, PL.3-2)

I区北西で検出した土坑。遺構の約1/3は調査区外。当初の検出時の平面は、南北150cm×東西75cm以上（推定約80cm強）の楕円形だが、土層断面から、確認面を20cm程度下げすぎているのが分かり、本来遺存していた上面長軸は94cm前後である（土層の「B'」層は地山崩落土）。下部は長軸方向で特に大きくオーバーハングしており、南北220cm×東西90cm前後に広がる部分があったと推定できる。袋状貯蔵穴である。底面は南

SK09土層記

- 0 無機ローム上・浅黄褐色八女粘土ブロック・黒褐一級褐色土ブロック5%、白砂5%
- 1a 無機ロームブロック主体・褐色褐色ブロック15%・黒色・灰粒少しまりあり
- 1b 細緻褐色土・明褐色（一層）色土ロームブロック20%+褐色ローム土粒5%+八女粘土（C-D層）小粒20%・5%・しまりあり
- 1c 褐褐色一級褐色土・明褐色（一層）色土ローム土粒5%+黒色土粒子（10リットル以下）1%・しまりあり
- 1d 細緻褐色土+褐色ロームブロック20%+褐色ローム小ブロック・粒子2mm未満
- 2 人骨褐色ローム+褐色一級褐色土ブロック5%、しまりあり
- 3 黑褐色土+褐色ローム土粒10リットル以下10%・八女粘土20リットル以下3%・黒色土粒子1%・しまりややあり
- 4 壊褐色（-にじいろ）褐色土+明褐色（一層）色土ロームブロック25%+褐色土10%・しまりあり
- 5a 褐褐色（-褐色）色土+明褐色ローム土粒ブロック・粒子10-15%+褐色土25%+八女粘土2-5%・しまりややあり
- 5b 褐褐色土+褐色土（-明褐色）土ローム粒子（10リットル以下）10%+明褐色土10%+褐色土20%+八女粘土小ブロック・粒子1-2%+黒色土粒子1%・しまりあり
- 5c 5-1層ごとに層の間、褐色（-明褐色）色土+褐色一級褐色土小ブロック・粒子2-7%+八女粘土粒子2%・しまりややあり
- 6 5-5層ごとに、褐褐色（-褐色）色土+明褐色土小ブロック・粒子25%+八女粘土小ブロック・粒子2%+黒色土粒子5%・しまりややあり
- 7 褐褐色（-褐色）色土+明褐色（-褐色）色土ロームブロック5%+褐色土粒子・小粒2%+黒色土粒子2%・しまりややあり
- 8 褐褐色（-褐色）色土+褐色土（-明褐色）色土上部明褐色土小ブロック・粒子25%+八女粘土小ブロック・粒子2%+褐色土粒子5%・しまりややあり
- 9 細緻褐色土+褐色土10%+褐色ローム土粒子1-2%+八女粘土粒子1%・しまりややあり
- 10 褐褐色（-褐色）色土+褐色土（-明褐色）色土上部明褐色土ブロック10-15%+上部土粒少+黒褐色土上部ブロック2-5%・しまりややあり
- 11 褐褐色（-褐色）色土・（6層より多い）褐色ローム小ブロック・粒子2-5%+明褐色ロームブロック5%+灰斑土有無有無粒子1-5%以下2%・しまりややあり
- 12 壊褐色（-褐色）色土+褐色ローム小ブロック15%・しまりややあり
- 13b 褐褐色（-褐色）色土質土+八女粘土上部無層理山地山頂7%+褐色土小ブロック5%・しまりややあり
- 13c 褐褐色（-褐色）色土の粘質土+明褐色（-褐色）色ローム中少小ブロック30%+黒色土有無粒子1-5%以上+土粒小形・しまりあり
- 14 褐褐色（-褐色）色土質土+明褐色（-褐色）色ロームブロック5%・しまりややあり
- 15 壊褐色（-褐色）色土質土+褐色土1-2%+褐色土20%・しまりややあり
- 16 褐褐色土やや粘質土+明褐色（-褐色）色ローム中少小ブロック7%・しまりあり
- 17 明褐色の裏面のローム土上部ブロック土+褐色-褐色土上部ブロック20%+黒色粘土2-5%+八女粘土小粒子5%以下・しまりややあり
- 18 褐褐色（-褐色）色土やや粘質土+明褐色（-褐色）色ロームブロック5%+褐色土1-2%・しまりややあり
- 19 壊褐色（-褐色）色土やや粘質土+明褐色（-褐色）色ロームブロック30%+褐色土1-2%+八女粘土小粒子5%以下・しまりややあり
- 20 褐褐色（-褐色）色土質土+褐色土2%+灰斑土20%・しまりややあり
- 21 褐褐色（-褐色）色土ロームブロック20-30%+褐色土20%・しまりややあり
- 22 壊褐色（-褐色）色土やや粘質土+明褐色（-褐色）色ローム土ブロック5%+褐色土1-2%・しまりややあり
- 23 壊褐色（-褐色）色土質土+明褐色（-褐色）色ロームブロック20%+褐色土1-2%・しまりややあり
- 24 壊褐色（-褐色）色土質土+明褐色（-褐色）色土ローム大小少ブロック20%+褐色ローム土粒子2%+灰斑土2%・しまりややあり
- 25a 2層ごとに地山崩落土（-褐色）色土や粘質土+明褐色（-褐色）色ロームブロック25%+八女粘土20%+褐色土20%・しまりややあり
- 25b 2層ごとに地山崩落土（-褐色）色土や粘質土+明褐色（-褐色）色ロームブロック25%+八女粘土20%+褐色土20%・しまりややあり
- 25c 2層ごとに地山崩落土（-褐色）色土や粘質土+明褐色（-褐色）色ロームブロック25%+八女粘土20%+褐色土20%・しまりややあり
- 26 壊褐色（-褐色）色土+明褐色ロームブロック40%+褐色土30%以上1-2%+八女粘土小ブロック2-5%・しまりややあり
- 27 壊褐色（-褐色）色土やや粘質土+明褐色（-褐色）色ロームブロック25%+褐色土25%+八女粘土小粒子5%以下+土粒小形・しまりややあり
- 28 褐褐色（-褐色）色土質土+明褐色（-褐色）色ロームロームブロック・粒子25-30%+褐色土20%+八女粘土小粒子5%以下・しまりややあり
- 29 褐褐色（-褐色）色土やや粘質土+明褐色（-褐色）色ローム小ブロック・粒子5-10%・しまりややあり
- 30 壊褐色（-褐色）色土質土+明褐色（-褐色）色ロームブロック15%・しまりややあり
- 31 壊褐色土やや粘質土+明褐色（-褐色）色ロームブロック50%・しまりややあり
- 32 壊褐色（-褐色）色土質土+明褐色（-褐色）色ロームブロック3%・しまりややあり
- 33 壊褐色（-褐色）色土質土+明褐色（-褐色）色ローム中少小ブロック15%+八女粘土小粒子2-5%・しまりややあり
- 34 壊褐色（-褐色）色土質土+明褐色（-褐色）色ローム土・小ブロック20-25%+八女粘土（板付I式）小粒子5%以下+土粒小形・しまりややあり
- 35 壊褐色（-褐色）色土質土+明褐色（-褐色）色ロームブロック3%・しまりややあり
- 36 黄褐色（-にじいろ）色土質土+八女粘土上部a鳥類ローム下部地山崩落土（粘土質）+（にじいろ）褐色土クヌガブロック
- 37a 壊褐色土40%
- 37b 壊褐色土10%
- 38 八女粘土+褐色土5%
- 39 褐褐色ローム上部地山崩落土、明褐色一級褐色
- 40 鳥類ローム下部地山崩落土、明褐色一級褐色
- 41 八女粘土上部または鳥類ローム+八女粘土無層理層
- 42 八女粘土

北200cm×東西75cm前後だろう。土層を見ると、中央が山状になっており、自然崩落というよりは埋め戻しされた可能性がある。出土遺物（Fig.36-22～25、37-1.2）は、板付IIa式の土器群。ただし1点古墳後期～飛鳥時代の赤焼タタキ整形土器片があるが上層出土で、上部の攪乱からの混入品である。

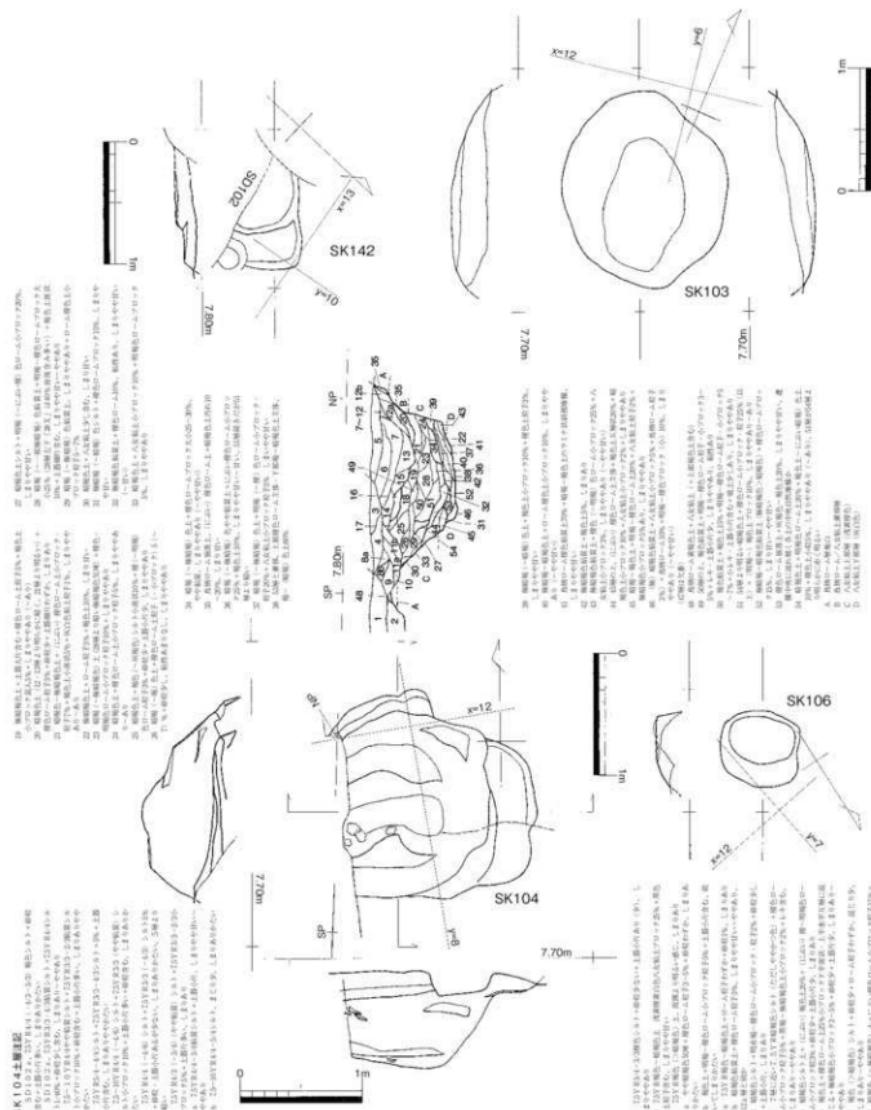


Fig.19 SK103・106・SX142実測図、SK104実測図・土層図 (1/40)

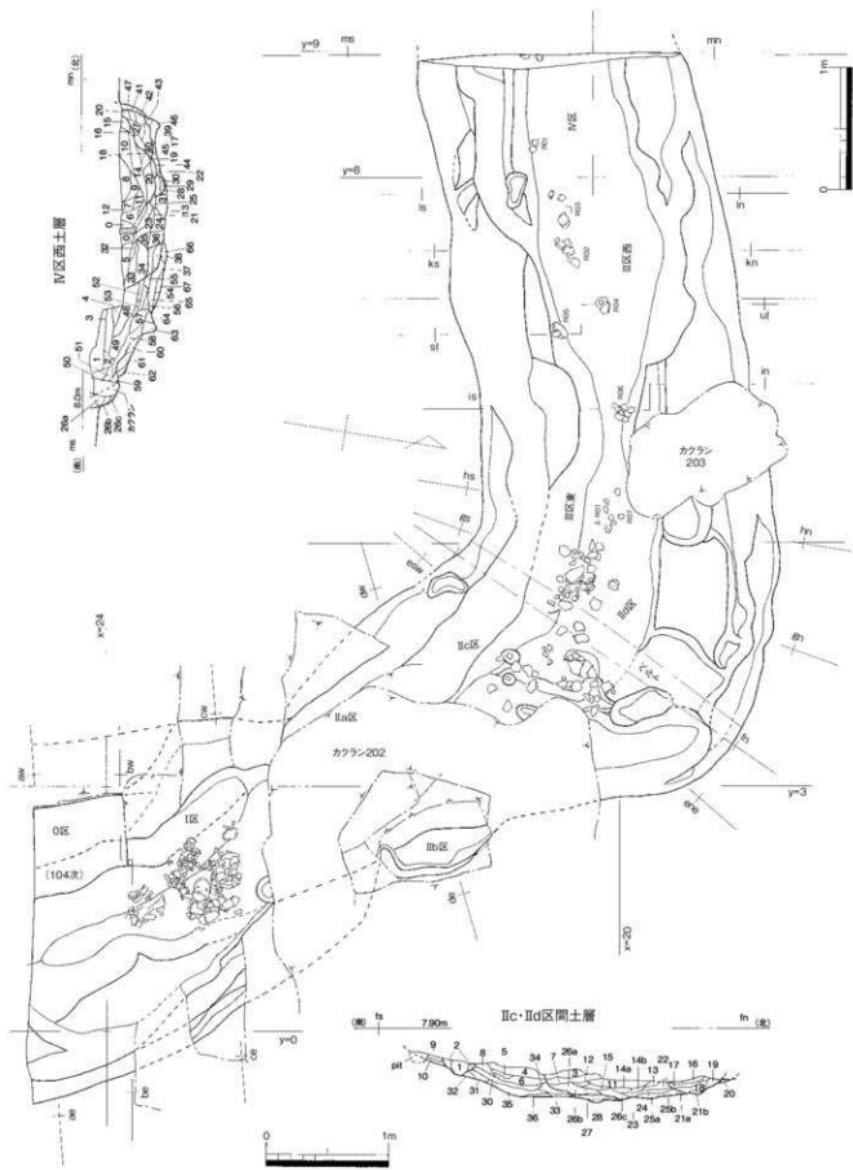


Fig.20 SD101 (方形周溝墓) 実測図・土層図 (1/40)

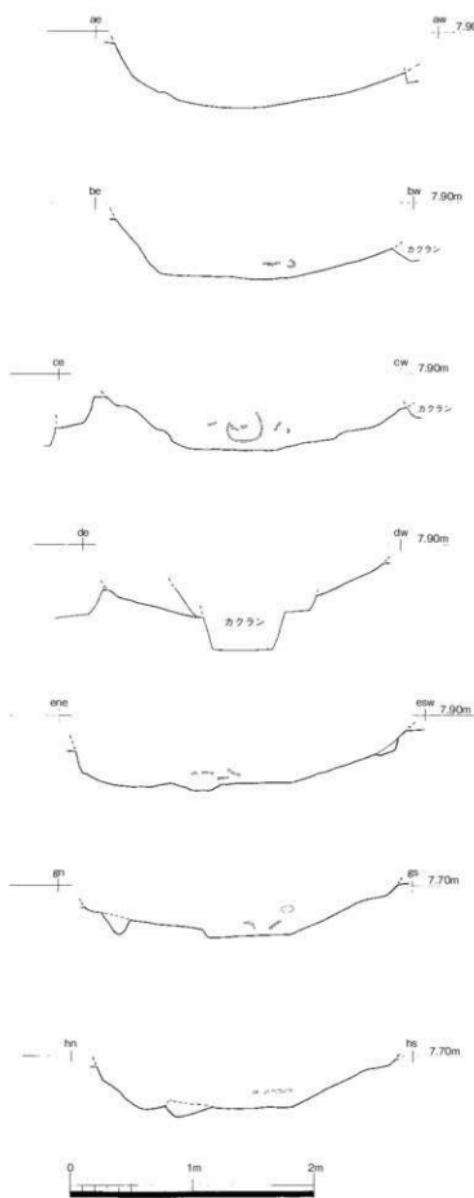


Fig.21 SD101東側溝・隅角部断面図 (1/40)

・SK (SX) 104 (Fig.19中央・下、巻頭図版3-11、PL.3-7.8)

II区北西で検出。SD102a、SP105、SK106に切られる。西縁は調査区外になる。北西側と東側上部がテラス状に広がる。南北170cm、東西160cm以上（推定180cm前後）の不正隅丸形状。深さは、検出面の高い北側から約80cmの遺存。堆積はおよそレンズ状の自然堆積。用途不明の土坑である。出土遺物が少なく時期決定は難しいが、中世後半？の土師器壺（Fig.37-6）から、SD102の掘削時期に近接した15世紀頃のものか。

・SK103 (Fig.19右上、PL.3-6)

II区北西、SX104の東側で検出。略南北138cm×略東西60cm、深さ34cmの楕円形土坑。覆土はにぶい褐色土。出土遺物は少ないが（Fig.37-4.5）、中世前半の土師器壺の時期であろう。

・SK142 (Fig.19左上、PL.3-9)

II区北東で検出。SD102に切られる。長軸92cm以上（推定105cm前後）×短軸60cm以上（推定70cm前後）、深さ18cmの長方形土坑。覆土は極暗褐色土。土坑としたが、周囲のピット（柱穴）の分布を見ると、「SC02」とした推定円形堅穴住居に伴う可能性もある（Fig.4.5）。出土遺物は僅少で時期不明だが、円形住居に関連するなら弥生時代中期か。

・SK106 (Fig.19右下)

II区北西で検出。SX104を切る。径70cm前後の不整円形、深さ24cmの遺存。覆土はにぶい褐色～褐色土。出土遺物はほとんどないが、SX104を切ることから中世後期か。土坑としたが、SP105、SP035と組み合わさる掘立柱建物の一部の柱穴になる可能性もある。

・SK10 SE03上部で検出した小土坑。

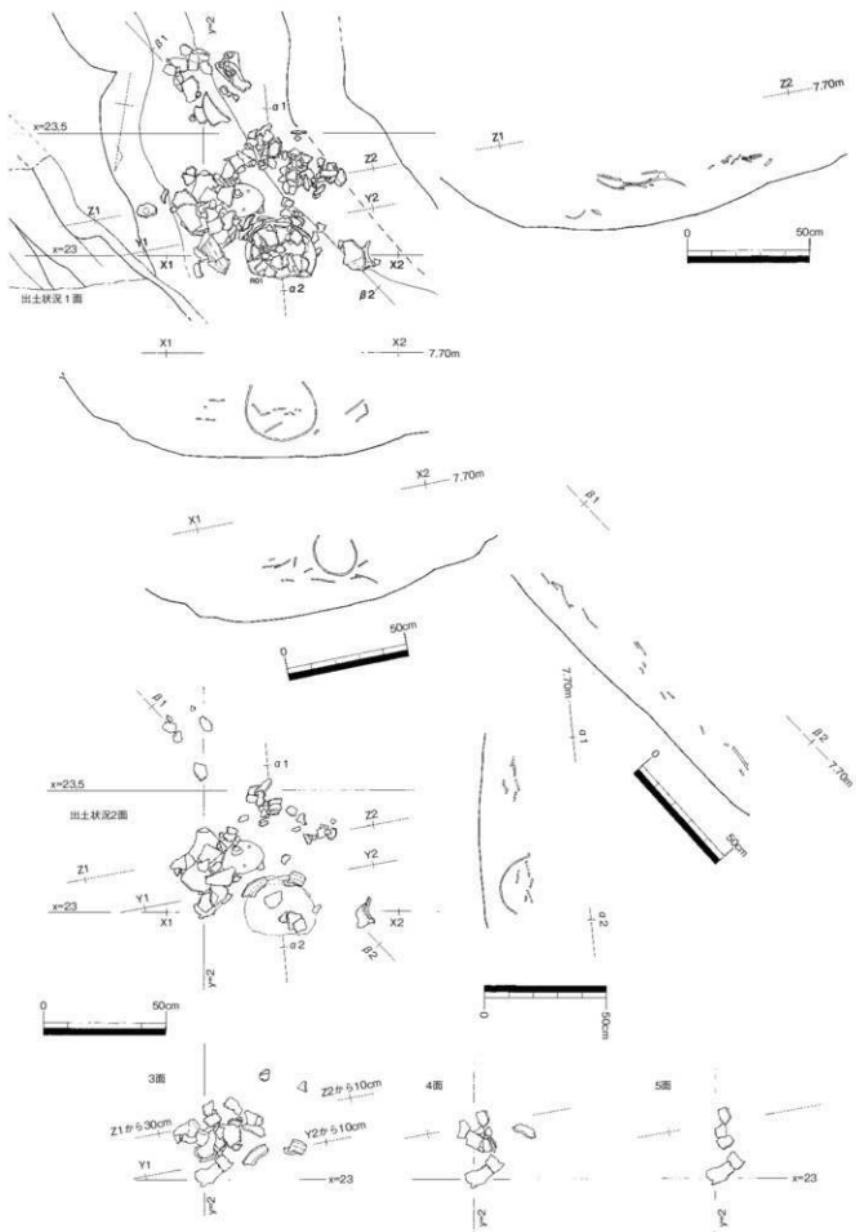


Fig.23 SD101-I 区遺物出土状況図 (1/20)

きわめて浅く不明瞭な土坑で、SE03西側上層覆土の相違を誤って掘削した可能性があり、個別記録をとっていない。ただし遺物は分けて取り上げた。出土遺物（Fig.37-3）は、須玖Ⅰ式新相～須玖Ⅱ式古相の鉢形土器。SE03最下層の土器群に近い様相で、SE03掘方覆土内とするのが妥当か。

・SK07（Fig.5）

I 区のSE06西側で検出した土坑。東側を基礎擾乱で切られ、SE06との直接の切り合いはない。南北104cm以上（推定110cm前後）×東西50cm以上（推定70cm前後）、深さ17cm（北側の高い面から）の遺存。やや淡い暗褐色覆土。上層中央に30×15cmの礫が流入。上層に土師器小皿があり（Fig.37-9）、中世の遺構であろう。

（3）柱穴（SP）

・SP022（Fig.5, PL.3-4）

I 区南東隅付近で検出。略南北50cm×略東西45cmの略方形柱穴。深さは23cmの遺存。北東側にテラスがあり、柱痕は南西側に寄る。覆土は極暗褐色土。掘方の南西隅に土器片が出土。出土遺物（Fig.37-8）は、受口状口縁の広口壺。須玖Ⅱ式に稀にある器形であるが、瀬戸内など外來系の可能性もある。SP022は、SP033やその東側のピットと並んで掘立柱建物や柵列などの一角をなす可能性があるが、調査区全体が搅乱と削平を受けており、全体像は不明である。

（4）竪穴住居（SC）

那珂170次調査は全体的に削平が顕著であり、明確な竪穴住居の掘方は認められなかつたが、柱穴の並びから円形竪穴住居の可能性があるものが2か所あり（Fig.5）、簡単に報告しておく。SC01は、I 区中央南東で、ちょうどSE08を取り廻むようにならぶ円形状の柱穴群である。ただし北側から北東側は、柱穴があるべき位置に擾乱があり、不明確である。柱穴列の復元径は、約5.0mである。SC02は、I 区南東からII 区北東にかかる位置にある。SK142はこの一部か、もしくは重複関係にある。SC02の柱穴列の復元径はSC01に近く、約5.0m前後である。SC01、SC02いずれも、円形竪穴住居であろうこと、周間にSE03、SK04などの須玖Ⅰ式新相～須玖Ⅱ式の遺構があり、南側のSD102やSD101にも須玖Ⅱ式前後の土器群が混入していることから、それらの時期幅内の遺構と推測される。

（5）溝状遺構（SD）

・SD101（Fig.20～24、表紙写真、巻頭図版3-12～14、同4-1～4、PL.3-10～19、PL.4-1～4）

II 区南半で検出したL字状に曲がる溝状遺構である。南側に隣接する（SD101-0区は重複している）那珂104次調査 SD01、SD02（Fig.25）と合わせて方形周溝墓（Fig.26）になる遺構の一部である。遺構の溝の長さや各所の溝幅の法量の詳細については、挿図（Fig.20.21）を参照されたい。

SD101は、0～IV区に分けている。うち、0区は104次調査との重複部分、II区はII a～II d区に、III区は東西に細分している。0区は、102次の埋め戻し土を除去後、102次の調査時に最下部（わずかに遺物が出ている；Fig.38-2ほか）と擾乱部分下部が掘削されていなかったので、今回は完全に掘削した。このため102次の溝掘削底面は少なくとも数cm程度は掘削が足らない部分があるとみられる。0区北側（104次調査時は擾乱下部）からI区中央にかけては、下層から一括土器群が出土した（Fig.20.23）。土器群は折り重なっており、比較的短い間に落下しないと投棄されたと考えられる。この部分の一括土器群は、ほぼ古式土師器（II A期～II B期：久住1999・2017）で占められ、おそらくは周溝の墳丘にあったテラスや墳頂部から比較的短い時間に落下したか除去され投棄されたものであろう。なお、底面からは一定程度浮いており、墳丘での土器群供獻祭祀の時期よりは後のものであり、一時期の祭祀の「一括埋納」的な「一括性」はない。しかし、後述するII c区以西の土器群が弥生時代各期の土器が多く混入するものとは異なり、一定の「一括性」を有するとも評価できる（Fig.38-3～27、Fig.39-3～5）。



Fig.24 SD101-II・III区遺物出土状況図 (1/20)

104次調査全体図（周溝突出状況）

※座標は日本測地系（第Ⅲ系）

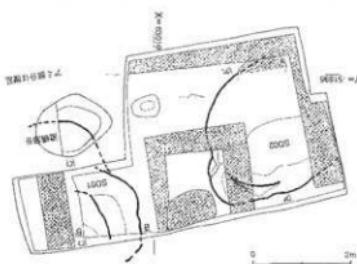


Fig.25 104次調査平面図 (1/100)

SD101-I区の周溝残存幅は228~245cm前後、深さは0区で50cm~I区北側で40cmの遺存だが、深さの遺存は上面の削平程度にもより、底面の標高は逆に、0区で7.36m、I区南で7.30mとなっている。I区北側とII区南東半(IIa・IIb区)は大きく搅乱が入っているが、IIb区は島状に辛うじて周溝外縁が残る。IIa-IIb区の間や周囲に搅乱があるが、遺存する最大周溝幅225cm、周溝底面の標高は7.30m前後である。この部分では搅乱のためもあるが、遺物はあまり出土していない。0区からII区南東

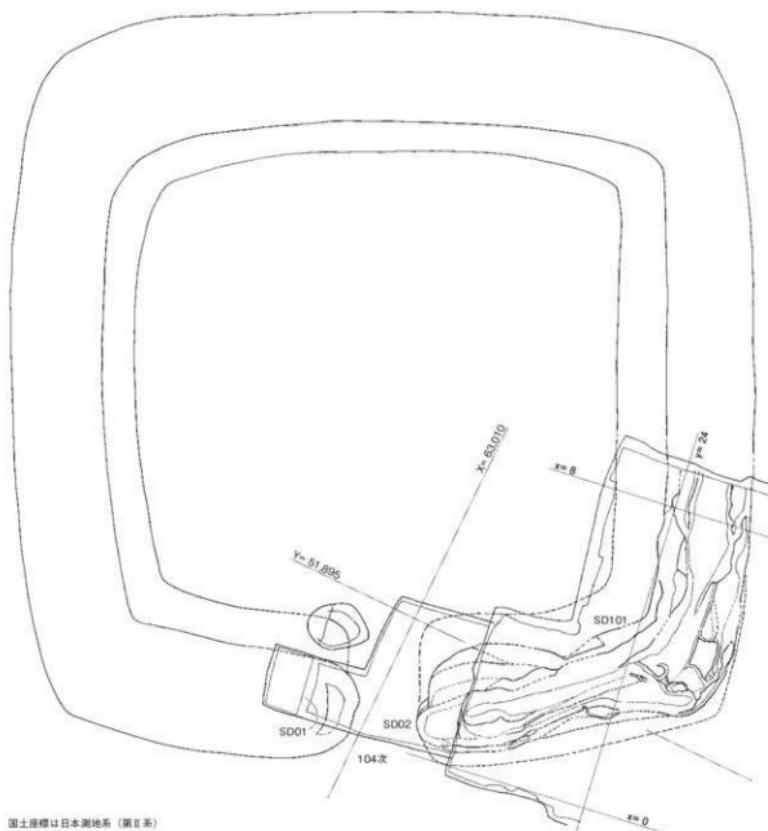


Fig.26 方形周溝墓復元図 (1/125)

半の周溝横断面を見ると（Fig.21）、断面ae-aw、be-bw、ce-cwは周溝外縁の立ち上がりがやや急で、内側の立ち上がりがやや緩やかである。これは想定される墳丘斜面に続く造成のためであろう。周溝隅角（II c 区）から北側周溝（II d 区～IV 区）の横断面もおよそ同じ傾向にある。ただし断面de-dwは内外の差が不明確である。

II c 区は東側に大きな擾乱が一部かかるが、周溝隅角部付近は遺存している。なお周溝隅角は直角にならず、やや鈍角である。この部分での周溝幅は272cmの遺存で、周溝底面は、内側下端が標高7.35m前後、周溝中央やや外側で7.27m前後となるが、外縁部へは一度やや上がった後にまた少し下がり標高7.30mとなる（断面ee-ew）。周溝外縁部は、隅角断面fs-fn（II c - II d 間土層）にも表れているが（Fig.20）、周溝が若干埋没した後に、外縁部が溝状に再掘削されている状況である。この状況は北側周溝にも続く（Fig.20のIV区西土層など）。この時期が問題だが、下層に明らかに時期の離れた頃ではなく、周溝が下層上位付近まで埋没した古墳時代前期のうちであろう。出土遺物の項で再論するが、周溝墓に伴う大部分の土器群はII A期からII B期だが、中層以上や周囲擾乱からわずかにIII A期古相頃に下る土器が含まれ、その時期前後の再掘削と推定する。II c 区には一括土器群があるが、これは土層ベルトを挟んでII d 区・III区東端（III a 区東）の一括土器群と一連のものである（Fig.20, 24）。出土状況的には墳丘から流れてきたものであるため、意図的な埋納や投棄としての「一括資料」ではない。しかもI区の「一括土器群」と比べて、分布がやや疎らであること、遺存率の悪い個体が多いとの、時期の異なる土器（より古い時期の弥生土器）の破片が少なからず含まれている（Fig.39-11, 14, 16～19, 21, 27, 29, 40-1～35, 6, 22, 25）ことが異なる。そのため、周溝墓墳丘上に供獻土器がこれら「一括」土器群に含まれている可能性が高いが、同時に墳丘下や墳丘盛土に含まれた前代の土器破片も混入するような流入、堆積過程があったと考えられる。II d 区は、断面gn-gsで周溝幅246cmの遺存だが外縁部が擾乱で他の箇所より下がっている点を留意する必要がある（土層断面fs-fnでは282cm）。深さは、周溝内側下端が標高7.31m、中央の最下部が7.27m、ここから外側はテラス状にやや上がって7.34mとなる。この周溝底面中央より高い底面外側テラスはII d区だけの幅80～100cmだけあり、この外側の斜面も段状になっていて、あるいは周溝外側から内側に降りるような階段状施設だった可能性もある。その場合、墳丘側には、周溝底面が狭くなる西側のIII a 区に曲がり、その内側斜面にテラスが二段（下方はIII a 区、上方はII d - III a 区）があるので、そこを通ることになる。後述する方形周溝墓の「陸橋」とは別の施設であろう。II d 区ではII c 区ほどの幅はないが、周溝外縁に細い溝状落ち込みが認められる。この部分の底面の標高は7.3m前後である。この溝は、II c 区外縁の再掘削溝の継ぎであろうが、掘方形状が異なりV字状をなす。この延長は周溝底面外側ないし外縁部立ち上がりにIII a 区途中まで認められるが（III a 区東では周溝中央底面と同じ深さになる）、擾乱を挟んで不明確となる。しかしそれは、掘り込みが当初の周溝底面まで達しなかったからであって、IV区西土層で認められるように、III・IV区外縁部に続くとみられる。

SD101-III区は、III区東（III a 区）とIII区西（III b 区）に分けられる（任意座標y=6.5が境界）。周溝の幅は、III a 区東で245cm前後、中央で225cm前後、III b 区中央で238cm、III区西で226cmである。周溝の深さ（標高）は、III a 区東で7.28m、III a 区中央では7.32m、III b 区東～中央は7.28～7.29m、III b 区西では7.30mである。遺物は散漫に出土し、先述したII c 区から一連のIII a 区東側の土器群以外に、III a 区中央（III区R06）、III b 区東（III区R04.05）、III a 区中央～西（III区R02.03）がまとまって出土している。いずれも墳丘側から落ち込んで流入した状態である。底面からはやや浮いているものが多い。しかしこれらは必ずしも周溝墓に伴う古式土器ばかりではなく、弥生土器なども含む。弥生中期土器や早期～前期初頭の土器が混入しているのはII c 区～III a 区の遺物群と同様である。

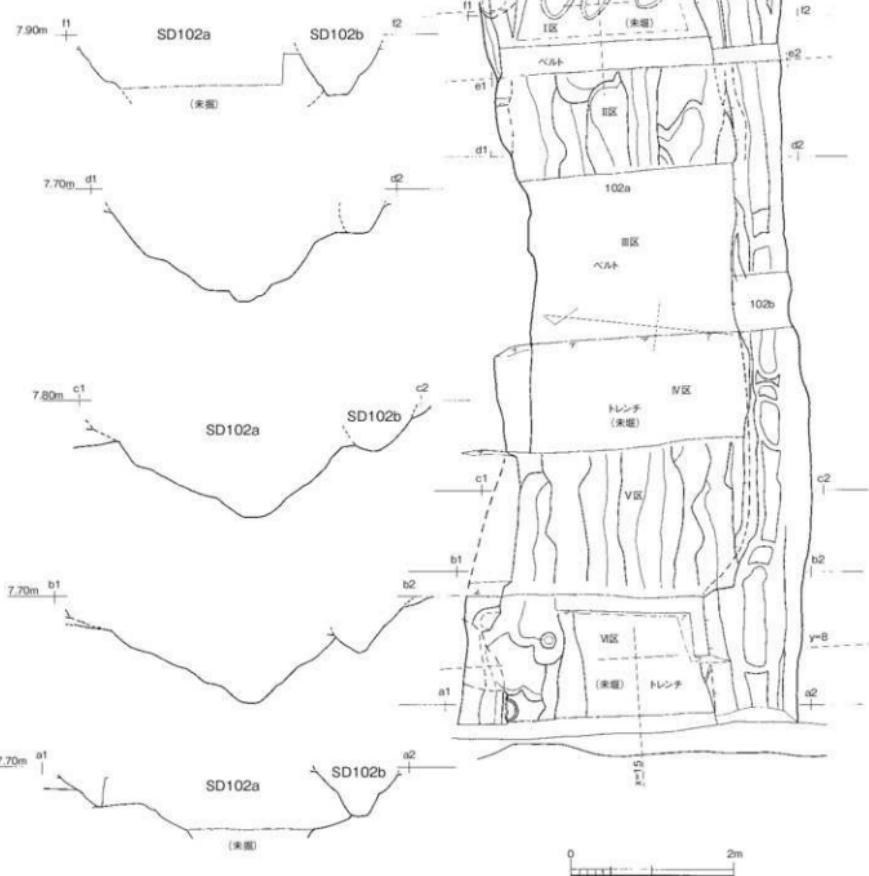
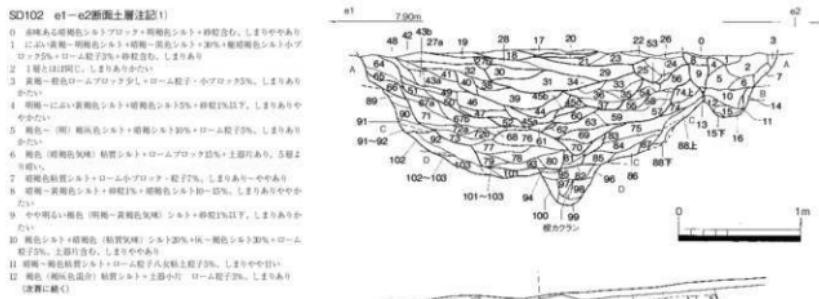


Fig.27 SD102平面図・断面図 (1/60)、土層図 (1/40)

SD101-IV区は、周溝幅240～246cmで、底面は標高7.30m前後だが、土層断面（IV区西）を見ると底面に凹凸がある。IV区でも遺物の出土が散漫に出土するが、一部下層にまとまりがある（IV区R01）。またIV区西土層精査中にも上層にやまとまりがあった。平面図には反映していないが、周溝外縁の再掘削溝が土層にみられ、底面は7.36m前後である。外縁立ち上がりより少し深くなる部分がある。

以上、SD101（方形周溝墓周溝）について詳しく報告してきたが、ここで170次SD101の東側に接続する那珂104次SD02と陸

表3: Fig.27 SD102 e1-e2断面土層注記?



Ph. 3 那珂104次SD02出土二重口縁壺

28. 雨潤園—岩淵色粘質土・ローA 3%・八女粘土 1%・灰岩 1%。全体に粘質土層(やや膠質のシルトも少し含む)、混じり少ないので、しまりやがあり

79 前褐色～赤みのある解剖面粘土土（粘質シルト・砂質シルト混合）。粗陥颗粒土やであり、砂礫含む。ロームブロック、鞋子5%+瓦女粘土ブロック-粒度5%+砂礫あり1%。しまりやや佳い。26~29は通の解剖。

混合土。ロームブロック、松の木名 \times 八女粘土わずか。砂糖あり
+酸化マンガン(沈殿形態黄褐色) +茶葉地色土含む +炭粒あり
和 下の筋層に近い、暗赤褐色粘質土。八女粘土混入徴状5-
7%。しまり甘い、下邊によどみのある土層

83 (赤みのある) 草原色土。灰褐色若干+暗褐色若干+ローム粒子3%+八次軸土わずか。しまりあり

84 明褐色-暗紅褐色土。ローム小ブロック・粒子2%。從粒1%+暗褐色あり

85 灰褐色地帯、暗紅褐色土。ローム30%。从粒1%~3%

86. 棕褐色細胞土+暗灰褐色土+シーム土。八女粘土+2%
「」よりやけい「」ややあり
87. 86層とほぼ同じだがより粘土質。暗灰褐色粘質土+八女粘土
5%+シーム土2%。風化あり
88. 86層とはほぼ同じだが87層がやや薄い。暗褐色粘質シルト+八

女軸土小アロック、粒子3%+ローム小アロック、粒子2%+砂
礫やアリ。しもとやけだ。

ヨーテ少し。ローム既子2~3%。しまりややせい。上手にしまりややあり。
 柄、底柄に近いがやや明るい。褐色(一端黒色)±。ローム3%。
 八女柄主上。しまりややあり~あり。軽性ややあり
 (9) 線×底柄色±。ローム少ブロッタ。既子2%。八女柄上小丁

例：暗褐色新葉土。八女粘土上プロック、粒子7%+ロームわずか
+砂礫わずか。しまりやや良い。保水性は漸進的。

例：暗褐色粘土土圭体。八女粘土上プロック、炭酸など弱めに入

96 雜化マンガン沈殿帯？基面以上（本末相接上か）斑状に入る暗灰色粘質土。ロームブロック、粒径5%。八女粘土プロ。

ア・瓶子1~2%。粘性あり。底部より上部は4枚以上となる形態
 94 喜云周園土・八女粘土混配合・粒・3mmに達。
 第一 八女粘土ブロック主導層・暗褐色・暗褐色の汚れ。しまりや
 むあり。粘性あり

96 帽褐色粘土質。八女軽土プロ $\frac{1}{2}$ 20%。非常にしまり甘い
97 100種(帽褐色粘土質。八女軽土15%ほか)にはほかるがしまり甘い。上から入ってくる蜜で蜜がすばまる。味極と柔軟的、非常にしまり甘い

98. 100題に似たるがローム上も含む。暗雨風乾地粘土質。八北粘土10%～15%・ローム10%、しまり豆。

99. 暗雨風乾地粘土層・八北粘土30%・ローム5%，非常にしめ付の強い土層。

100. 暗雨風乾地粘土質。八北粘土プローブ35%・羅原一暗雨風乾地

100. 嫩褐色土色斑上・八重鉢土プロック5%・黒色・明褐色
ロック10%・嫩褐色土色斑上プロック5%・黒化マンゴン影響茶嫩褐色土
10%・混合層・しまりややあらややけい
101. 嫩灰色・やや青みある暗褐色色斑置上・ローム粒子わざか+
八重鉢土小プロック・粒子わずか・しまりややけい・ほば鰐土層

橋を挟んだ104次SD01について見ておく (Fig.25 : 福岡市埋蔵文化財年報VOL.19)。104次SD01は、最大幅265cmで、報告の土層断面A-A'部分では底面の標高が7.55mとする。ただし、104次SD02と重複する170次SD101-0区の底面は7.35mで、20cmも高い。陸橋に向かって底面が立ち上がってくるとはいえ、周溝幅がまだ大きい部分でのこの底面高は疑わしい。土層を見ると底面張り付きで暗褐色土が最下層覆土としてあるが、170次SD101の最下層の多くは地山ローム混じりの褐色土であった。この最下層は認識を誤ると地山が汚れているものとして把握することもあるので、実際104次SD02に重複するSD101-0区も最下層の掘削が5cm前後は不足していたので、104次の土層断面A-A'部分は若干の掘削不足があったものと推定する。一方、幅155~220cmの陸橋を挟んだ104次SD01の周溝幅は260cm以上、断面B-B'、C-C'からみた底面高は標高7.23~7.25mである。こちらは最下層が「明褐色土」であること、170次SD101の周溝底面の低い箇所に近いので、問題ないと思われる。

さて方形周溝墓の復元であるが、推測の部分が多いが、104次の陸橋が方形周溝墓の中軸線を通る仮定した場合、104次・170次での遺構遺存レベルでの周溝内側の規模は約14.5m前後、周溝内側下端間は約16.8m、周溝外側での規模は約19.3m前後となろう (Fig.26)。なお、周囲遺構の遺存度から見ると、周溝墓中央にあるべき主体部は、仮にその底面が当時の地表面以下に及んでいたとしても、削平されている可能性が高く、また主体部はおそらく埴丘盛土の中に営まれたものと推定される。

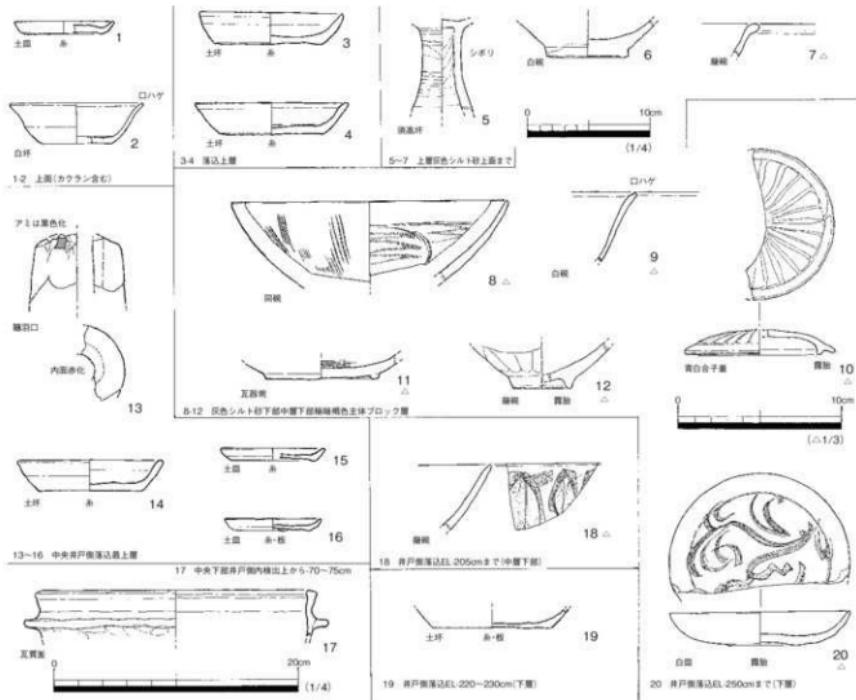


Fig.28 SE01出土遺物 (1) 実測図 (1/4, △1/3)

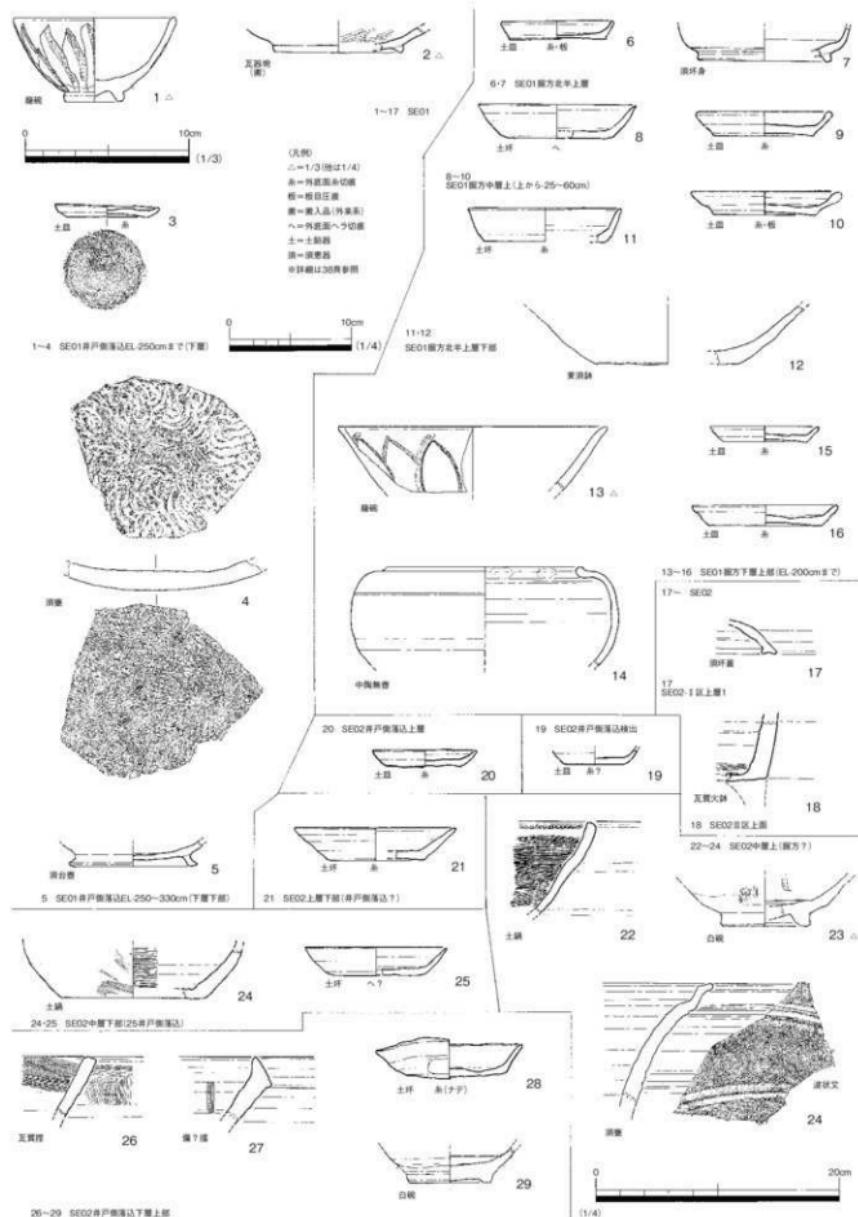


Fig.29 SE01出土遺物(2)、SE02出土遺物(1)実測図(1/3、△1/3)

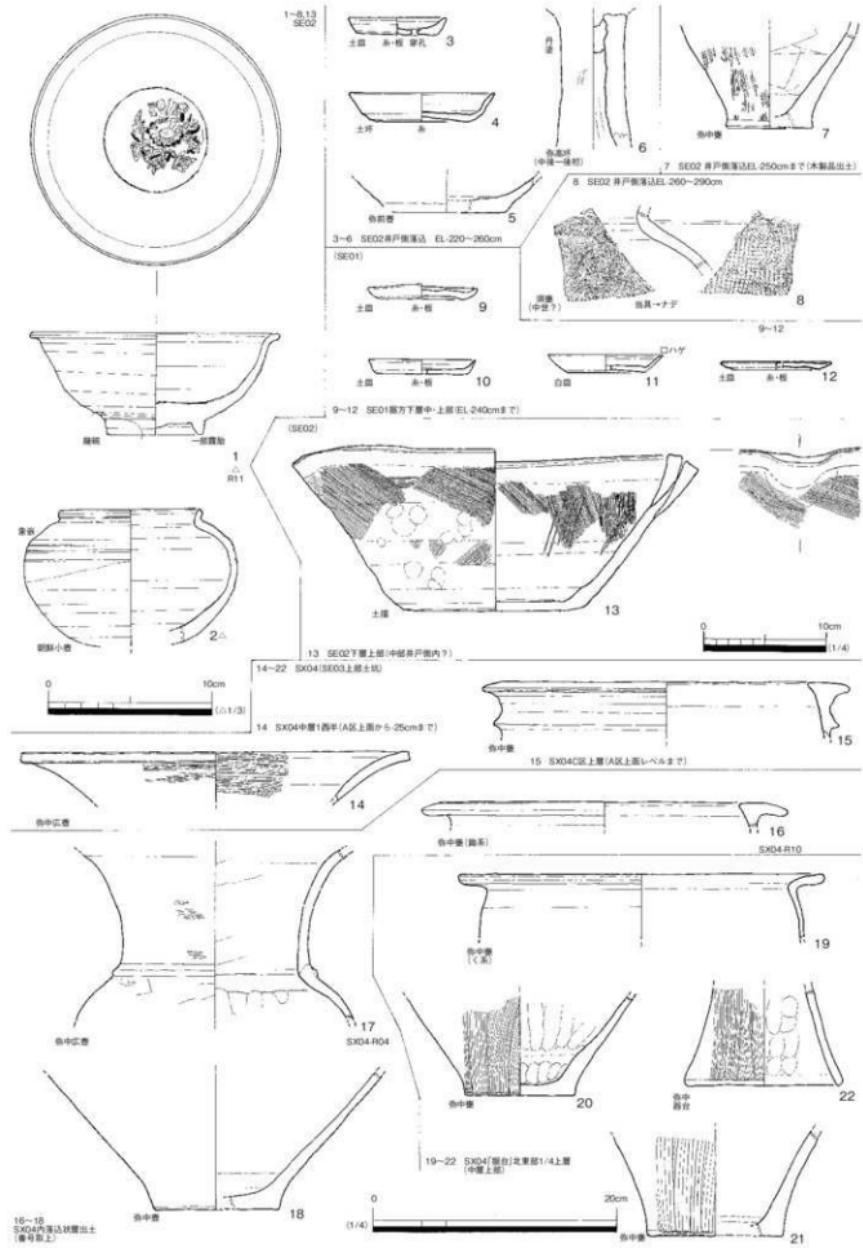


Fig.30 SE01出土遺物（3）、SE02出土遺物（2）、SX04出土遺物（1）実測図（1/4、△1/3）

・SD102 (Fig.27, 卷頭図版4-5~7, PL4-5~8)

II区北半で検出した幅広い大溝遺構。方位は、N-84°-Eで、およそ東西に走行する。溝の幅は、残りの良い西側で410~416cm、残りの悪い中央部で310~320cm、再び広がる東側で330~375cm前後である。発掘調査前半の調査区I区で、多数の井戸を苦戦した後の反転掘削でこの大溝が検出されたのだが、調査期間を若干延長しても全掘削できないことが明らかだったため、この溝については全掘せず、部分的な掘削でとどめ、他は地下に現状保存としている。溝は、当初掘られた幅の広い大溝SD102aと、それがほぼ埋没した後に南縁に細く再掘削されたSD102bに分かれる。SD102は調査区内を横切り、確認長9.4mと長いので、I~VI区に分けて掘削、遺物取り上げをしている。SD102aの断面形は、およそ逆台形に近いが、中央部のみ細くU字状に底面がさらに掘削されている。中央で深くなるU字状部分は、土層の観察によると、当初逆台形に掘削された溝があり、その最下層のみが埋没した時点で掘削されている。U字状溝部分と逆台形最下層部分は水流の痕跡があるので、水を流すために中央を掘り凹めた可能性があるが、U字状部分の底面レベルは必ずしも一方向に傾いていない。U字状部分の底面標高を以下記すと、II区東6.43m、II区西6.32m、V区東6.38m、V区西6.40mであり、未掘削のIII区下部あたりが最も深いと思われる。同様に、逆台形底面のレベルは、II区東6.65m、II区西6.45m、V区は6.60m前後である。いずれも一定していない。SD102aは、溝の西側で北側立ち上がりの一部がテラス状となっている。このレベルは、V区で7.00~7.08m前後、VI区で7.22~7.25m前後で、これは西側が高くなりより水平になる。SD102bは、溝の中央部（II区途中~V区）では、重複に気が付かず一気に掘削してしまったので溝幅が明らかでないが（ただしI区からII区の傾向を見ると、中央部の溝幅はやや狭くなっている）、V区は90cm幅程度のようである）、I区東で105cm、II区東で80cm、VI区東は120cm（V区から急に広がるか）、VI区西は100cmである。底面レベルは、I区で7.14~7.16m、II区東で7.14m、II区西で7.18m、III区中央で7.10~7.07m、IV区は7.11~7.16m、V区東半~中央で7.17~7.20m、V区西で7.04m、VI区中央で7.08m、VI区西で7.11mである。遺物の出土は、SD102aは全体に散漫だが比較的多量の遺物が出土している。ただし遺存度が良好なものは少なく、遺構の時期は新相遺物から中世後半以降だが、弥生時代、古墳時代、古代、中世前半の各時期の土器・陶磁器片が混入する。SD102bはより散漫な遺物の出土で、出土量も比較的少なかった。溝の時期は出土遺物（Fig.42）の最新相から、15~16世紀であろう。

III. 出土遺物

1. 土器・陶磁器 (Fig.28~43, 48)

出土遺物については、以下紙幅もあまりないため、詳しい説明記述ができない。そのため、挿図中に各遺物の出土遺構や遺構の中の区・層位・取上番号などを記入ただけでなく、以下（38頁）の＜凡例＞にあるように、基本的な遺物の種類（器種分類を含む）や、時代・時期、一部の調整や技法について略号などで注記している。また遺物の説明については、すでに「検出遺構」の章で記述している場合もある。また各時代の土器や陶磁器の分類や編年などについては、＜凡例＞に統いて参考文献リストを掲載した。

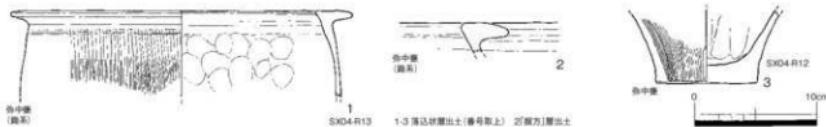


Fig.31 SX04出土遺物 (2) 実測図 (1/4)

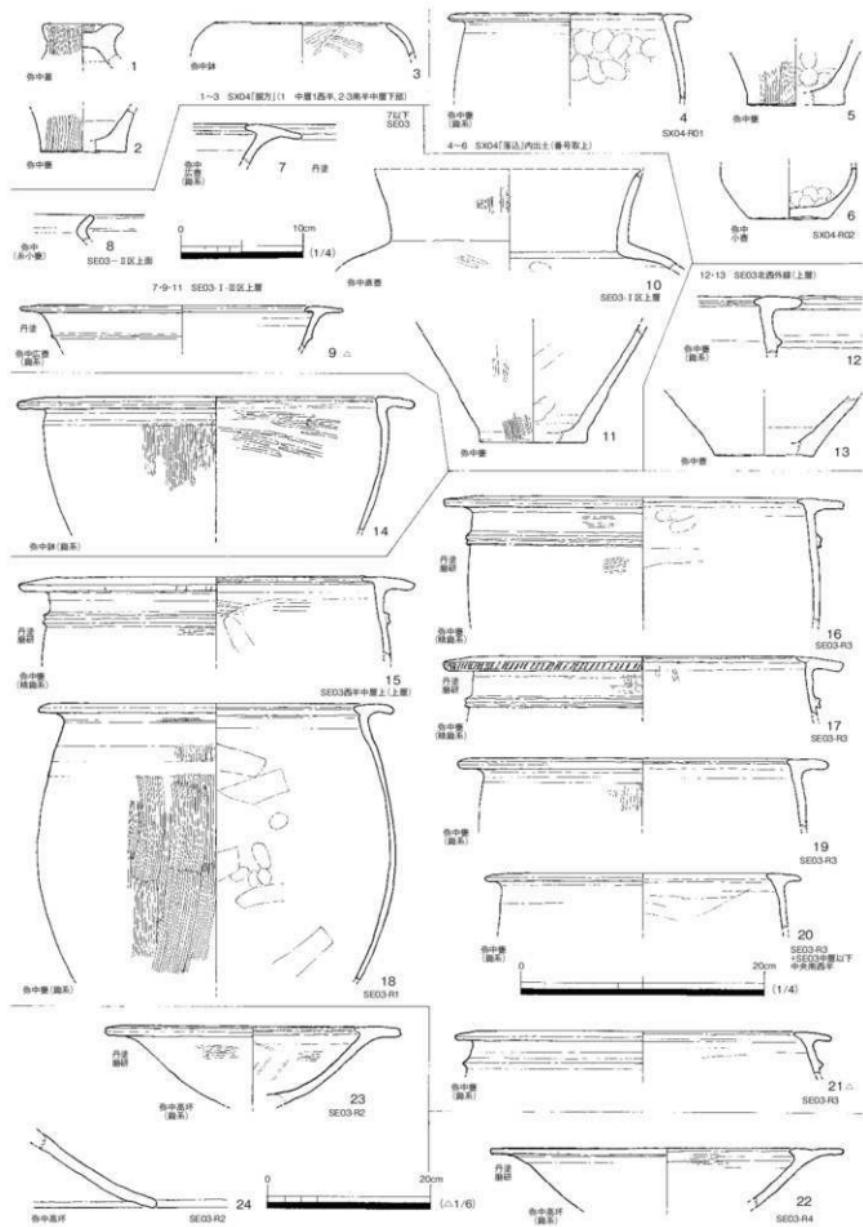


Fig.32 SX04出土遺物 (3) 、SE03出土遺物 (1) 実測図 (1/4、△1/6)

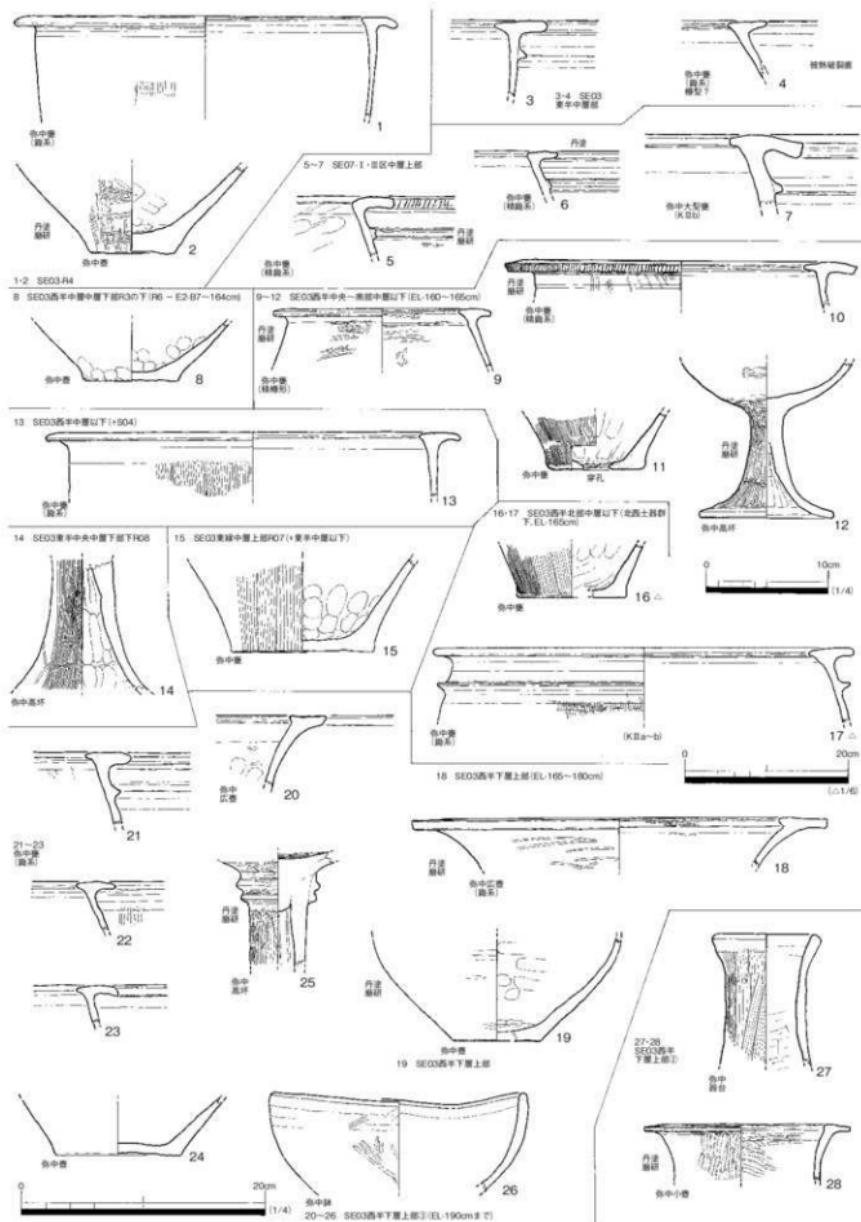


Fig.33 SE03出土遺物（2）実測図（1/4、△1/6）

<凡例> (Fig.28 ~ 43)

「土」=土師器、「須」=須恵器、「弥」=弥生土器、「古土」=古式土師器（古墳時代初頭～古墳時代中期前葉=須恵器出現までの土師器）、「白」=白磁、「龍」=龍泉窯系青磁、「同」=同安窯系青磁、「青白」=青白磁、「朝鮮」=朝鮮陶磁、「瓦質」=中世の瓦質土器、「東」=東播系（「東須」=東播系須恵器）、「中陶」=中国陶器、「陶」=陶器、「瀬戸」=瀬戸焼、「美濃」=美濃焼、「備」=備前焼、「赤焼」=古墳時代後期～飛鳥時代のタキ整形赤焼軟質土器またはロクロ整形「似非須恵土師器」、「撇」=外來系撇入品
「弥早」=弥生早期（土器）、「弥前」=弥生前期（土器）、「弥中」=弥生中期（土器）、「弥後」=弥生後期（土器）、「弥末」=弥生終末期（土器）、「古後」=古墳後期、「飛」=飛鳥時代、「奈」=奈良時代、「前末」=前期末、「中初」=中期初頭、「中後」=中期後半、「中末」=中期末、「後初」=後期初頭、「早～前」=早期～前期、「中～後」=中期～後期、「後～末」=後期～終末期
「皿」=皿・小皿、「杯」=杯、「碗」=陶磁器の椀、「塊」=陶磁器以外の土器の椀、「無壺」=無頸壺、「台壺」=脚付壺、「小壺」=小型壺、「土鍋」=土師器鍋、「土鉢」=土師器鉢、「擂」=擂鉢、「捏」=捏鉢、「広壺」=広口壺、「直壺」=直口壺、「小鉢」=小型鉢、「樽形」=樽形甕、「脚鉢」=脚付鉢、「婁鉢」=婁形鉢、「ひさご」=瓢形壺、「小台」=小型器台、「二重」=二重口縁壺、「長頸」=長頸壺、「小長壺」=小型長頸壺、「小脚鉢」=小型脚付鉢、「小塊」=小型塊、「塊高壺」=塊状高壺、「袋壺」=袋状口縁壺、「手焰」=手焰り形土器、「短壺」=短頸壺、「鼓台」=鼓形器台、「小鼓台」=小型鼓形器台、「複壺」=複合口縁壺、「鉢系」=鉢先口縁系、「く系」=「く」字口縁系、「板系」=板付系、「凸系」=凸（突）蒂文系（夜臼系）、「精」=精製土器、「糸」=底部糸切痕、「へ」=底部へラ切痕、「板」=板目压痕
「KIII a」「KIII b」など=横口 1979 による斐棺（大型婁）の分類と編年による型式名
「A系」「B系」「C系」=久住 1999・2017 による弥生終末期～古墳前期土器の系統分類名、「婁B」「婁C y」「婁D」「婁B（D）」=久住 1999 による古式土師器の婁の系統形式分類名（「婁B」=B（伝統的V様式）系統婁、「婁C y」=筑前型庄内庵、「婁D」=北部九州型D（布留式）系婁、「婁B（D）」=B系統技法保持者によるD（布留式）系土器の模倣・折衷品）、「精B」=精製器種B群（次山淳 1993 による古式土師器の特徴的な精製土器群の分類）

<参考文献>

- 田崎博之 1994 「夜臼式土器から板付式土器へ」『牛田裕二君追悼論集』牛田裕二君追悼論集刊行会 ※弥生時代早期～前期土器編年
橋口達也 1979 「斐棺の編年的研究」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』XXX I、福岡県教育委員会 ※弥生時代斐棺編年
田崎博之 1985 (18頁前掲) ※弥生時代中期土器の系統と編年
柳田康雄 1986 「高三瀧式土器と西新町式土器」『弥生文化の研究』4、弥生土器Ⅱ、雄山閣 ※弥生時代後期土器編年
久住猛雄 1999 (10頁前掲) ※弥生時代終末期～古墳時代前期土器の土器群系統と編年
久住猛雄 2008 「九州I 付編 弥生時代中期中頃～終末期古相までの土器一括資料」『井戸再考』第57回埋蔵文化財研究会資料集
※弥生時代中期中頃（須玖式新相）～I八期（終末期古相：久住1999・2017）までの編年基準資料
久住猛雄 2017 (10頁前掲) ※弥生時代終末期～古墳時代前期土器の土器群系統と編年
次山 淳 1993 「布留式土器における精製土器の製作技術」『考古学研究』第40巻第4号、考古学研究会 ※古式土師器の精製器種B群
申 敏敬 2000 「金官加耶土器の編年—洛東江下流域 前期陶質土器の編年—」『伽耶考古学論叢』3、財团法人駿河国史記録開発研究
院 (本文) ※韓国加耶地域初期陶質土器編年
舟山良一 2005 (2) 「編年案」『牛頭窯跡群 一括報告書』大野城市教育委員会 ※須恵器「牛頭編年」
長 直信 2009 「九州島における7世紀の須恵器」『終末期古墳の再検討』第12回九州前方後円墳研究会発表資料集 ※6・7世紀の北部九州の須恵器編年と層年代観
中世土器研究会編 1995 「概説 中世の土器・陶磁器」真陽社
太宰府市教育委員会編 2000 「太宰府条坊跡XV～陶磁器分類編一」太宰府市の文化財第49集 ※古代・中世陶磁器「太宰府」分類
佐藤一郎 1996 「輸入陶磁器の分類」『博多遺跡群出土墨書き土器集成』博多研究会 ※中世陶磁器「博多」分類
山本信夫 1990 「統計上の土器—歴史時代土器の編年研究によせて—」『九州上代文化論集』乙益重隆先生古稀記念論文集刊行会
中世土器部 (杯・皿類) 編年
楠原慶太 2007 「土師器食具から見た中世博多の土器様相—博多遺跡群の土器編年—」『九州考古学』第82号、九州考古学会 ※中世土器部編年

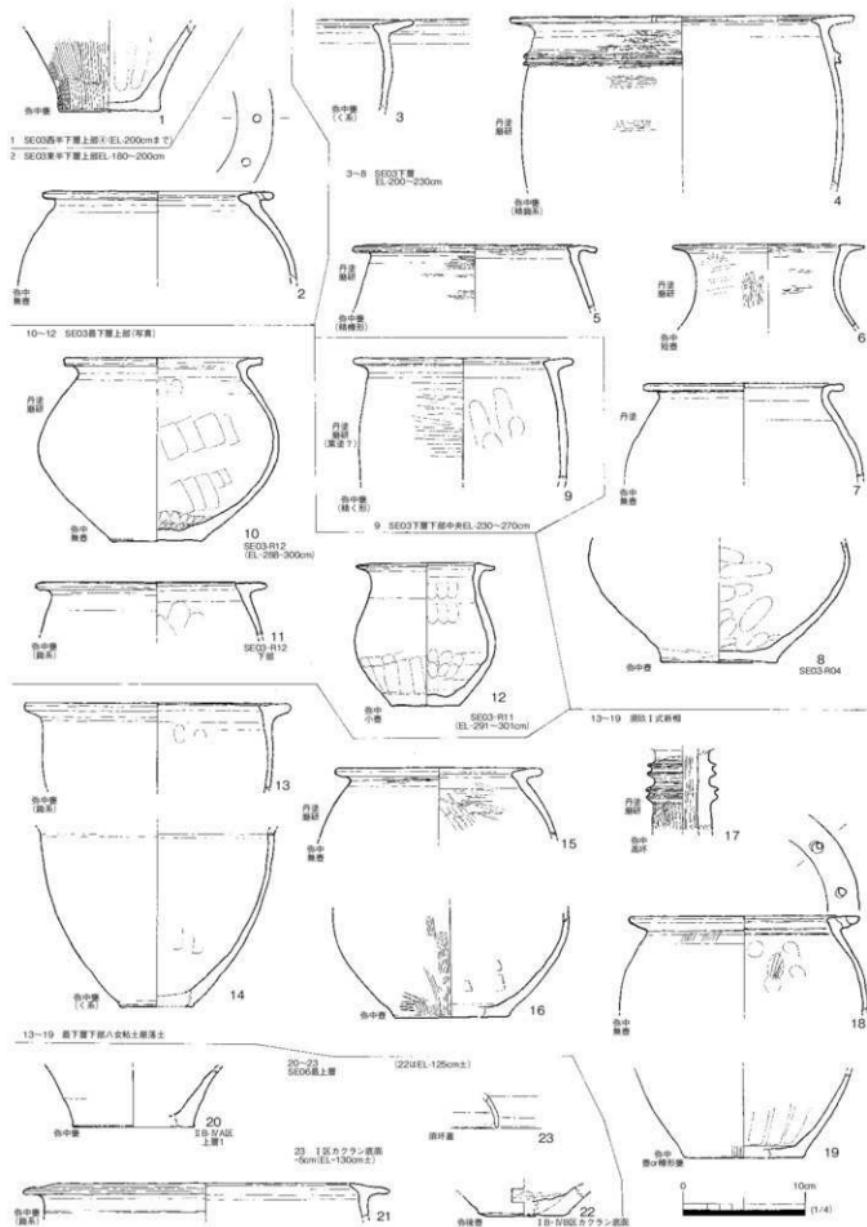


Fig.34 SE03出土遺物（3）、SE06出土遺物（1）実測図（1/4）

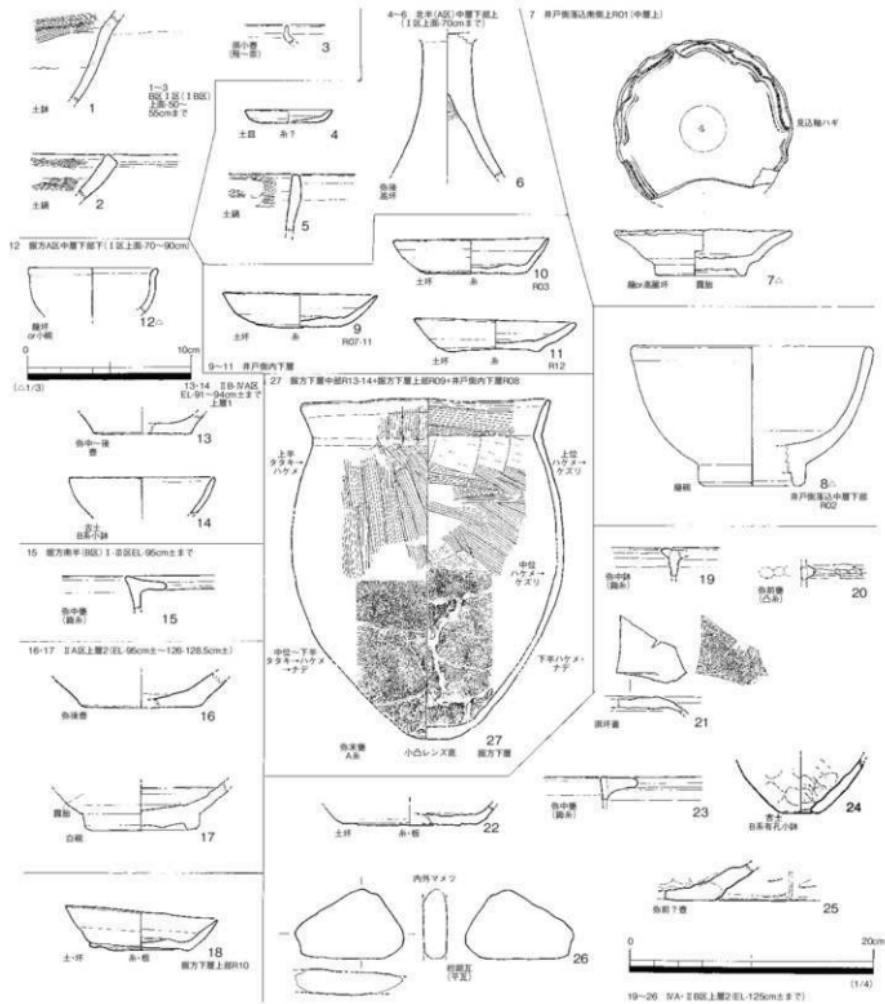


Fig.35 SE06出土遺物実測図 (2) (1/4)

出土遺物については、特筆すべきものを先に記す。SE03最下層の須玖Ⅰ式新相の、SE03（最下層以外）およびSK04の須玖Ⅱ式古相の土器群は、それぞれ「一括資料」としてよい資料である。SK05の出土土器は破片だが、板付Ⅰ式新相の良好な資料である。SD101（方形周溝墓）のうち、0区北端～I区の下層の資料は、II A～II B期が混在するが、埴輪祭祀供獻土器群の良好な資料である。後代の遺構出土だが、「板石硯」破片がある（弥生中期後半か）。SE03には弥生中期の石製鍛冶具があり、後代の井戸に弥生終末期前後の石製鍛冶具もある。また韓半島系の軟質土器塵や陶質土器短頸壺があった。

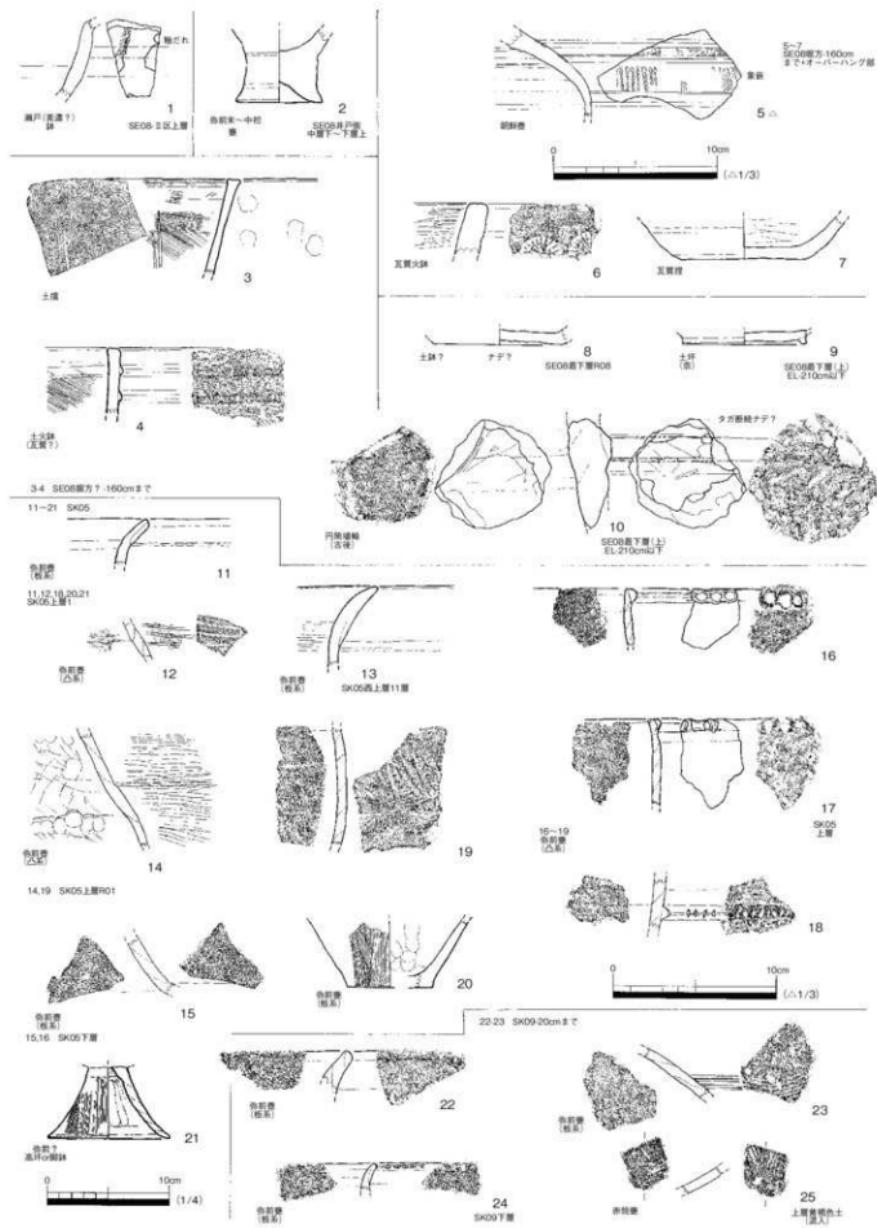


Fig.36 SE08出土遺物、SK005出土遺物、SK009出土遺物（1）実測図（1/4、△1/3）

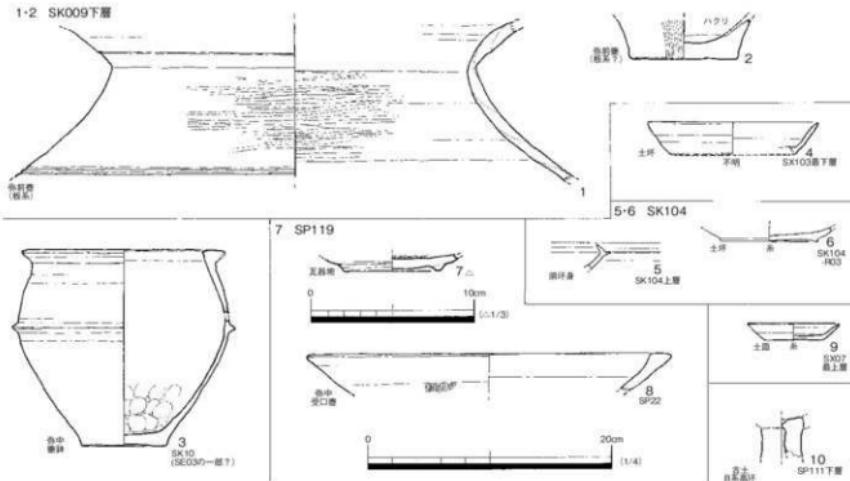


Fig.37 SK009 出土遺物(2)、その他土坑(SK・SX)出土遺物、ピット(SP)出土遺物実測図(1/4、△1/3)

前掲(38頁)の「凡例」により、図示した土器・陶磁器の説明は簡潔に果たしたものとするが、以下、特に触れるべきものについてさらに説明記述しておく。

(Fig.28) 12の龍泉窯系青磁は大宰府分類(以下「大」)碗III-2c。13の龍泉窯系は博多分類(以下「博」)碗II-1。20の白磁は、「大」皿VIIか。(Fig.29) 1の龍泉窯系は「博」碗III。14の龍泉窯系は「博」碗II-2。25の須恵器大甕は頸部波状文から須恵器III B期(舟山2008)。(Fig.30) 1の龍泉窯系は「博」碗IV。2の朝鮮陶磁は、青緑の地に白い象嵌のある磁器。高麗末期の可能性もある。7の弥生土器甕は須玖I式新相。14~22(およびFig.31、Fig.32-1.2)の弥生土器(SK04)は、須玖II式古相だが、15やFig.31-1などは須玖I式新相の様相を残す。(Fig.33) 3~26の弥生土器(SE03)は、おおむね須玖II式古相の幅内でよいが、4.6.18.20.21は須玖I式新相の様相を残す。逆に7の大甕(甕棺か)は、K III b式(橋口1979)であり、須玖II式新相に伴う場合が多いもの。26の鉢も粗製化の兆しがあり新相傾向。(Fig.34) 1~12の弥生土器(SE03)も須玖II式古相でよいが、3.7.9.10.11はやや古相の傾向がある。ただし7.9.10は丹塗磨研である。12は逆に粗製化しつつある小型壺で新相傾向。13~19は、15.17のような丹塗磨研土器を含むが、13の甕や15.18の口縁部など型式学的に古く、須玖I式新相(末)とすべきか。(Fig.35) 6の弥生土器高坏は、後期中頃前後か。7の青磁は、龍泉系に形式は似るが、内底見込みの軸ハギや高台は高麗青磁的、深緑の発色は越州窯系青磁的で、分類不明。8の龍泉窯系は「博」碗V-2。24は内面上左ケズリ痕跡があり古墳初頭以降。27の弥生終末期の在来系甕は、内面ハケメ後一部ケズリだが、明瞭なハラケズリではなくI B期(久住1999-2017)までのもの。29の瓦は、調整が磨滅するが橙色の軟質焼成で、那珂遺跡群に多い「初期瓦」。(Fig.36) 1の朝鮮陶磁は、青緑の地に白い象嵌のある磁器。紋様が粉青沙器と似るが、色が逆。10は円筒埴輪片とみられ、窯焚焼成、浅黄褐色、突帯に「断続ナデ技法」がある。那珂遺跡群にある東光寺劍塚古墳の埴輪に類似するものがある。11~21のSK05の資料は一括資料に準ずるもの。壺5点のうち4点が板付系(11.13~15)、12は夜臼系。甕5点のうち4点(16~19)が夜臼系、20は板付系。21の高坏ないし脚付鉢は粘土带接合から夜臼系。板付I式新段階(田崎1994)だろう。22~24(25は上部混入)、およ

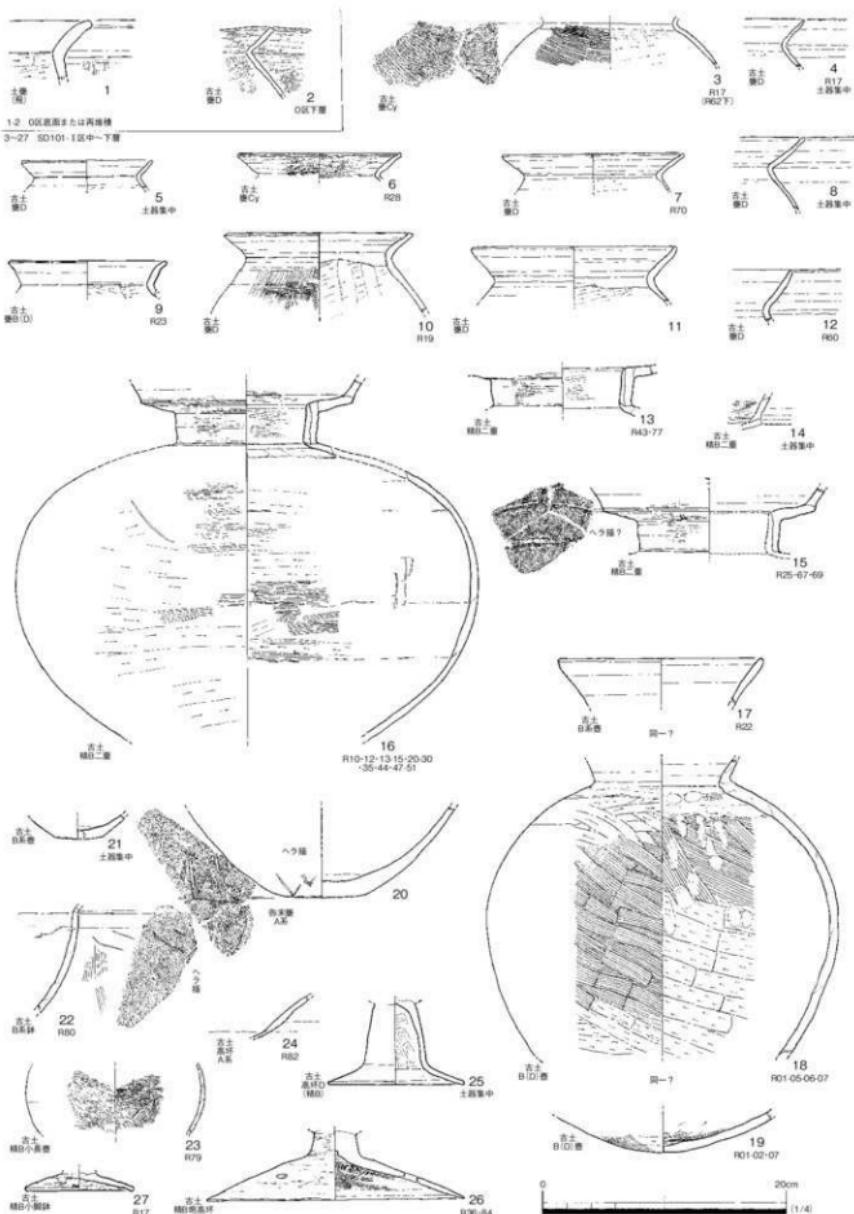


Fig.38 SD101 (方形周溝墓) 出土遺物 (1) 実測図<0区、I区 (1) > (1/4)

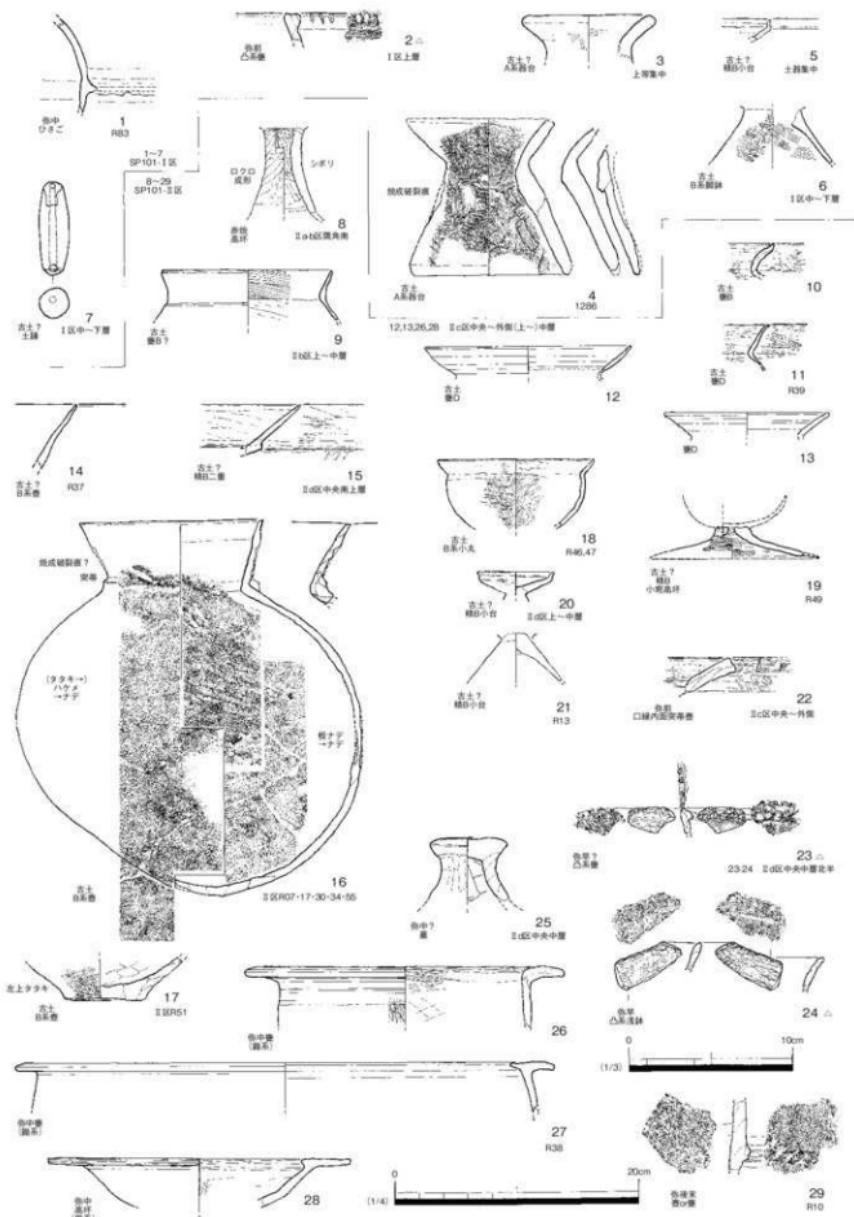


Fig.39 SD101 (方形周溝墓) 出土遺物 (2) 実測図< I区 (2) 、 II区 (1) > (1/4、△1/3)

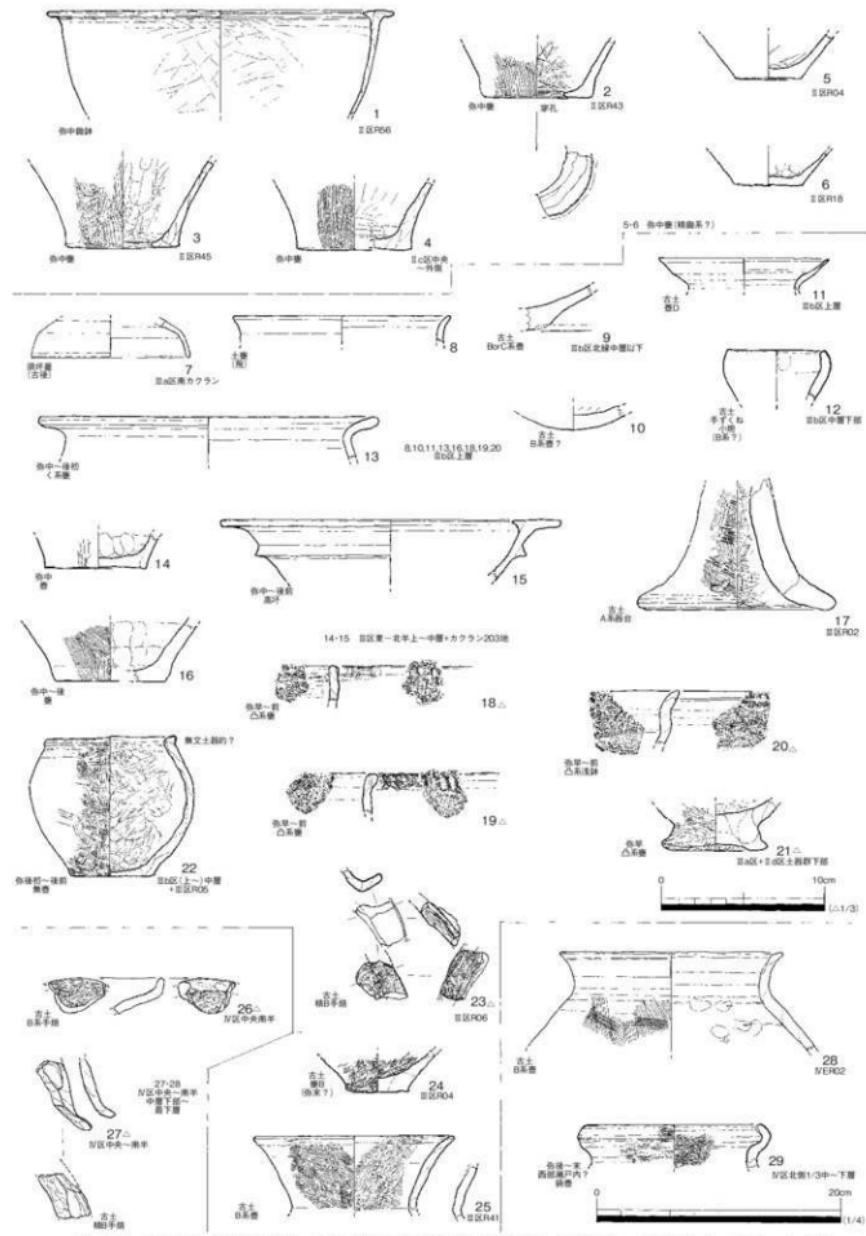


Fig.40 SD101 (方形周溝墓) 出土遺物 (3) 実測図<II区 (2)、III区 (1)、IV区 (1) > (1/4、△ 1/3)

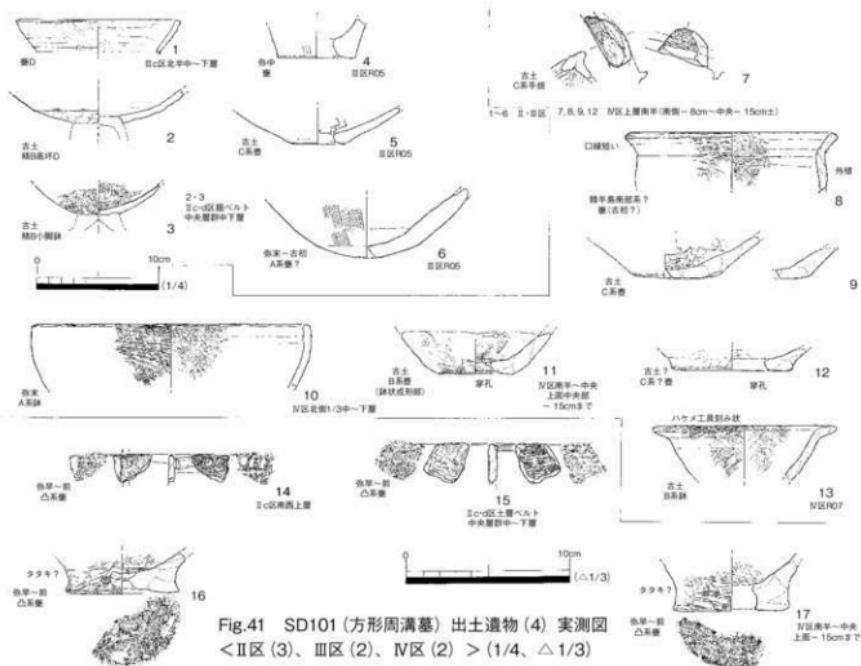


Fig.41 SD101 (方形周溝墓) 出土遺物(4) 実測図
<II区(3)、III区(2)、IV区(2)>(1/4、△1/3)

びFig.37-1.2 (SK09) は、板付 II 式古段階 (板付 II a 式)。本資料では壺・壺類が全て板付系となる。

(Fig.37) 3 の弥生土器は、須玖 I 式新相の壺形鉢か。8は受口状になる口縁部の弥生土器。類例は少ないが、須玖 II 式の広口壺または高坏であろう。(Fig.38) Fig.41まで方形周溝墓 SD101 土器群。3.6 は筑前型庄内壺 II 式 (久住2017) で II A 期か。壺 D (北部九州型布留系壺) は、あくまで型式学的な傾向で前後があるが、4.5.7.8.11は II A 期、2.10.12は II B 期。13~16およびFig.40-15は胎土に粗砂礫をやや含むが、橙色焼成、細密ヨコミガキの精製器種 B 群の二重口縁壺。頭部が太く短い傾向から II B 期。20は弥生終末期 (I A 期) の在来系壺。底部近くにヘラ描き。23.25~27は精製器種 B 群。25.26の高坏は脚据部が高く II A 期か。24の在来系高坏は型式学的に II A 期に下る。(Fig.39) 4 の在来系器台は焼成破裂痕があるが使用している。3.4およびFig.40-17のように在来系器台が複数ある。壺 D のうち、12は II A 期、13は II B 期か。9~11, Fig.39-9のように B 系壺もあるが、むしろ II B 期に下る型式。18は粗製の B 系小型鉢。16のB 系壺は焼成破裂痕があるが、4と同様に使用している。供獻壺のうち広口壺・直口壺は B 系 (14.16, Fig.40-25.28)、二重口縁壺は C 系 (類精製器種 B 群) の傾向か。時期差か機能差か不明。22.24およびFig.40-18~21、Fig.41-14~17のように弥生早期 (夜臼 II 式) ~ 弥生前期前半 (板付 II a 式まで) の土器群がある。また1.25.26~28, Fig.40-1~6.13~16, Fig.41-4のように須玖 II 式 ~ 弥生後期 1 式の土器群もある。8, Fig.40-7.8のように古墳後期 ~ 飛鳥時代の土器も散見されるが、これらは上層や擾乱出土。(Fig.40) 29はおそらく西部瀬戸内系とみられる袋状口縁壺。弥生後期か。23.26.27, Fig.41-7は手培り形土器。小片化すると認識が難しいだけで、珍しい器種ではない。技法系統も多様。11の壺 D は II B 期。(Fig.41) 6 の在来系壺は丸底で SD101 の時期に作る可能

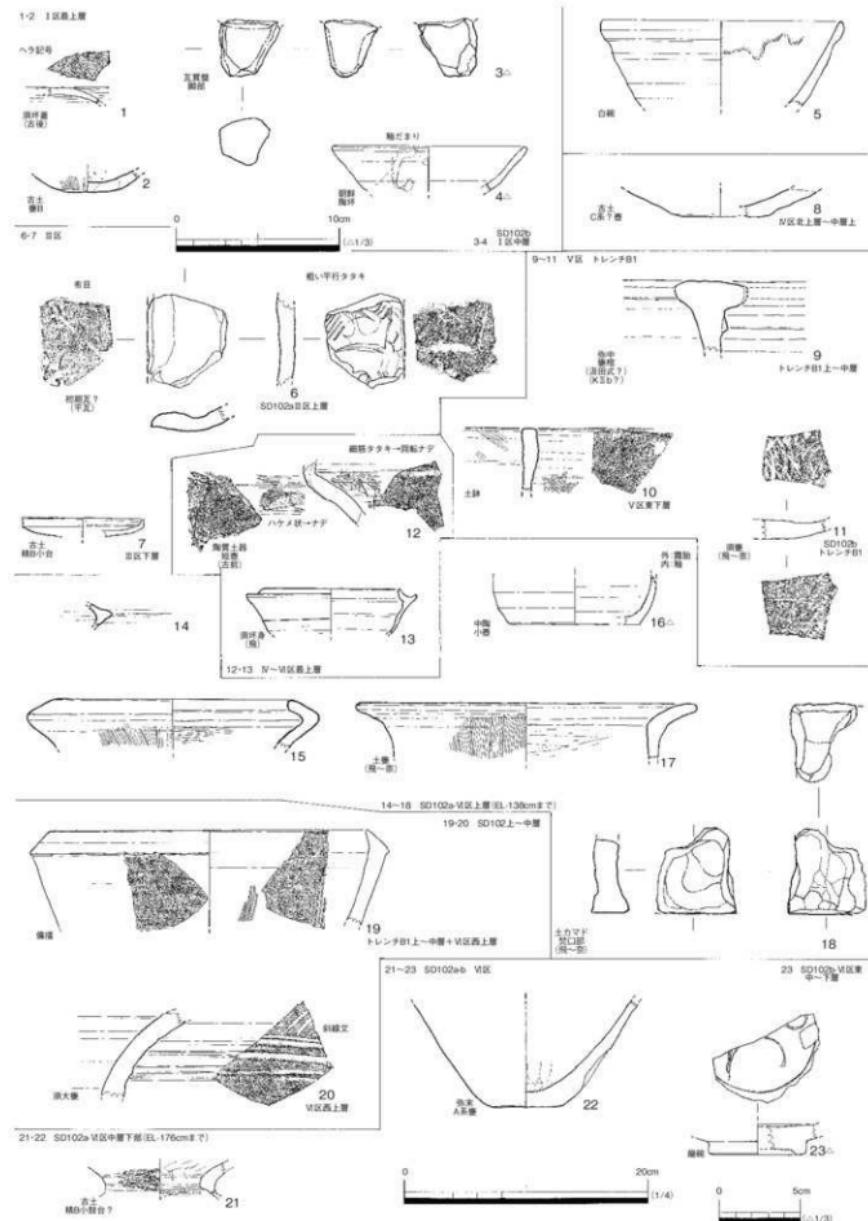


Fig.42 SD102出土遺物実測図 (1/4, △1/3)



性がある。2のD系精
製器種B群高杯は、杯

部上下が曖昧なのでII C期以降か。1の壺DはIII A期古相に下る。III A期古相の土器がSD102などII 区で散見され（Fig.42-21, Fig.43-1.2）、Fig.40-28も下る可能性がある。SD101外縁の再掘削時期を示すか。8の壺は一見北部九州の弥生終末期在来系壺に類似するが、口縁部が短く、また胴部が外傾接合で、韓國東南部の軟質土器壺だろう。類例は釜山市東萊目塚などにある。II A期～II B期併行。

(Fig.42) 4の朝鮮陶磁は、雜釉陶器で16世紀。6は粗いタタキがあり、「初期瓦」でも新相か。12は韓国の金官加耶の陶質土器短頸壺で、肩部形態から古相の時期（金官加耶Ⅰ～Ⅱ期：中2000）であろう。

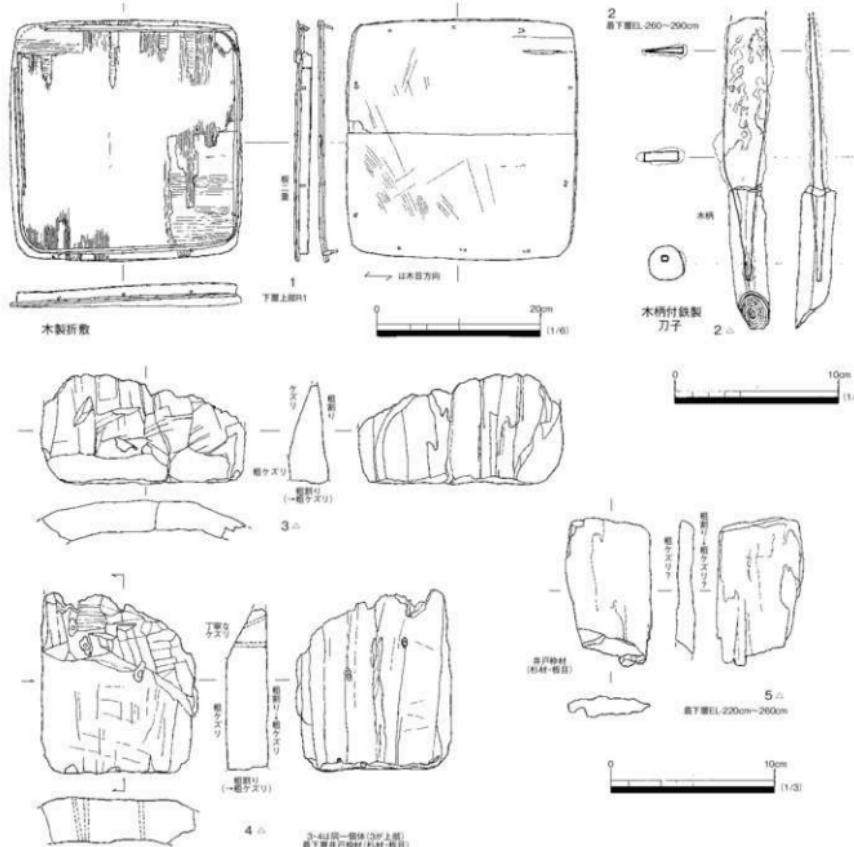


Fig.44 SE02出土木製品（・鉄製品）実測図（1/6、△1/3）

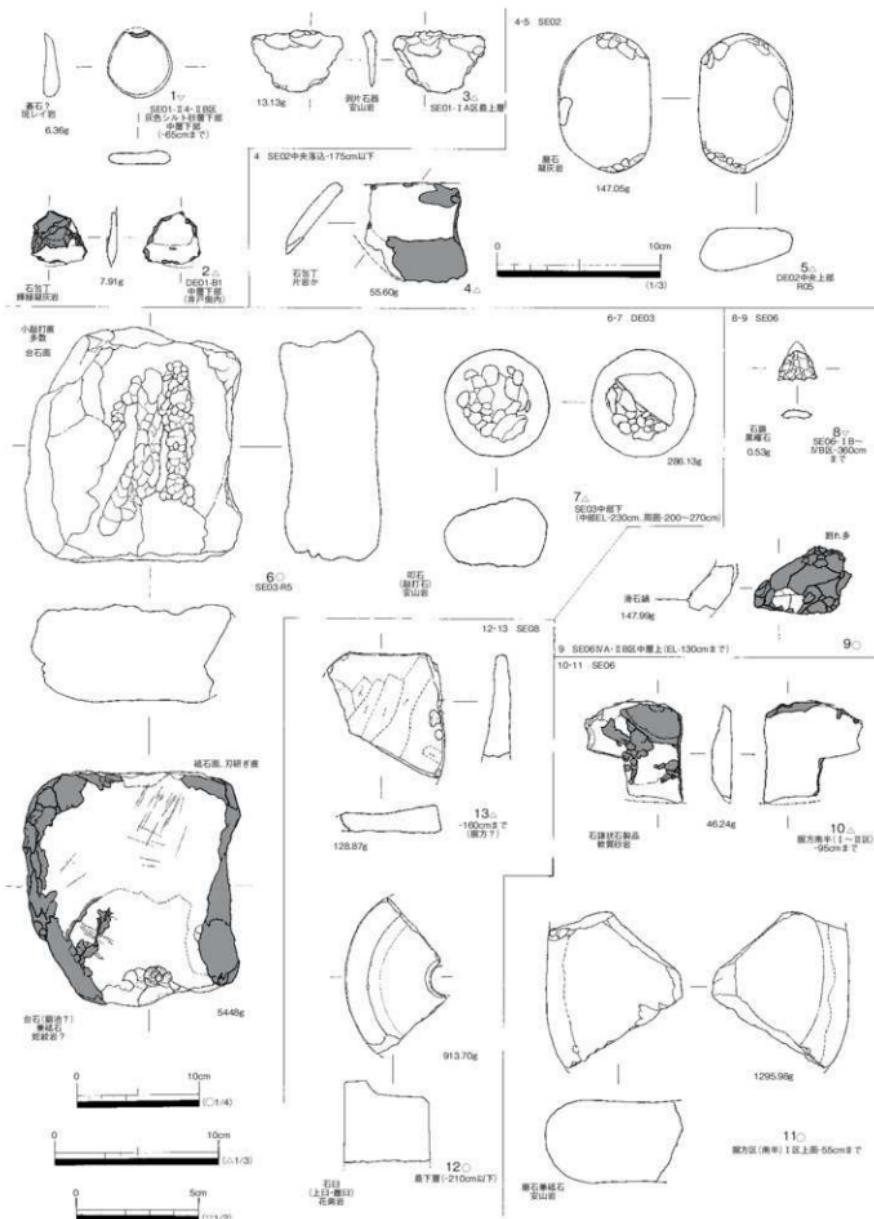


Fig.45 石製品実測図 (1) (∇ 1/2、 \triangle 1/3、 \circ 1/4)

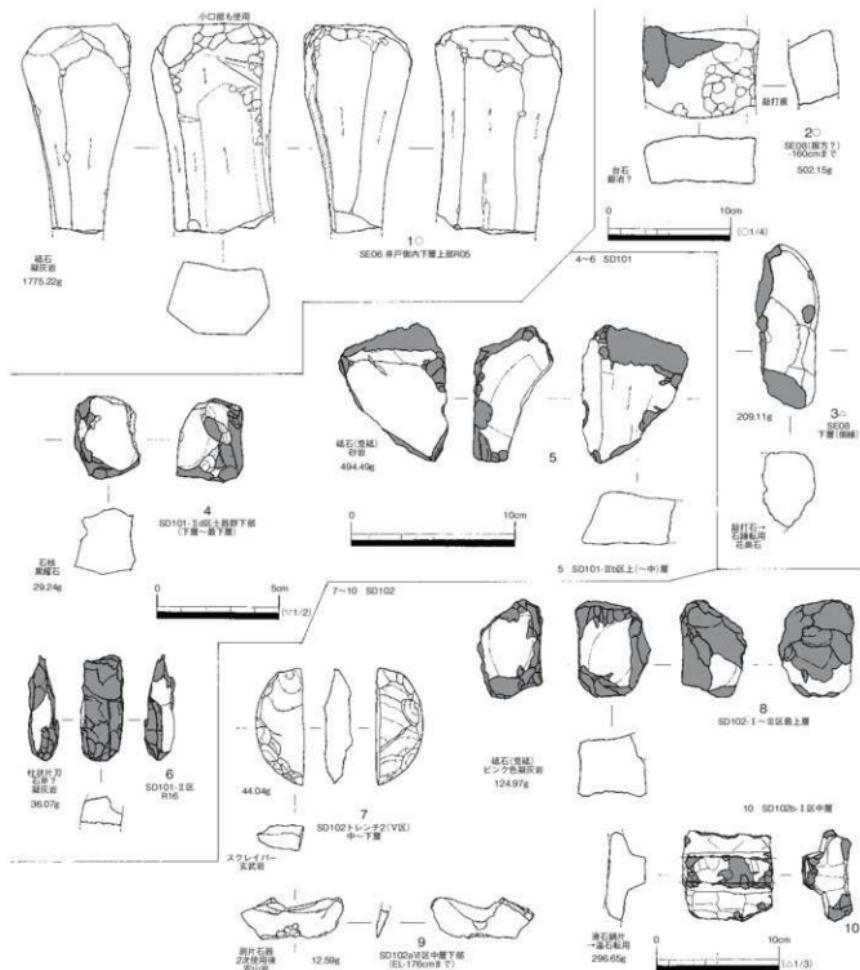


Fig.46 石製品実測図(2) (▽1/2, △1/3, ○1/4)

方形周溝墓に関連か。19の備前焼播鉢は傾きがやや不安だが、口縁部形態から備前焼IV期中頃、15世紀前半。20の須恵器大甕は頭部の斜線文から須恵器IV期（飛鳥時代前半）。21は精製器種B群だが、鼓形器台系X形小型器台の可能性がある。西新町遺跡12次に類例。Fig.43-1も同様。22の在来系甕は弥生後期後半相～IA期。(Fig.48) 耳を有さない粗製の中国陶器甕である。

(2) 木製品 (Fig.44)

1は「折敷」。薄い正方形板を木目方向を逆えて二重の底とし、細板を曲物にして、衝立状の仕切りを四周の縁から少し離したところで接合している。底板の接合は細い木釘8箇所で、曲物状衝立の接合は木結で行う。精巧な作り。3~5は割貫井戸材で、3,4は同一個体。粗削→粗削りの加工痕。

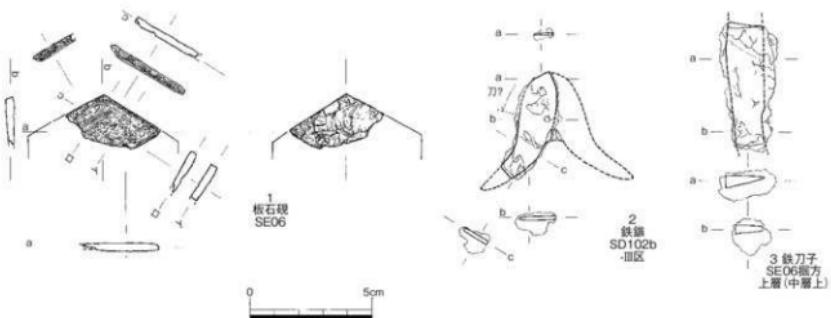


Fig.47 石製品実測図（3）<「板石硯」>、鉄製品実測図（2）（1/2）

（3）鉄製品（Fig.44-2、Fig.47-1.2、PL4-15.16、Ph.4・5）

Fig.44-2は木柄の残る鉄製刀子（小刀）。木柄は広葉樹材だろう。Fig.47-2はやや大型の無茎平根式鉄鎌。X線写真によると根抜孔らしき部分があり双孔だろう。類例が少ない形状だが、類品が博多遺跡群147次の鉄鎌未成品にある。47-3の刀子は斜角の片開。

（4）石製品（Fig.45・46、Fig.47-1）

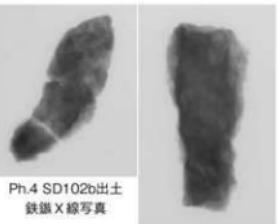
基本的な情報は挿図中（Fig.45・46）に注記した。この中で、鍛冶関係石製品があることに注目したい（Fig.45-6.7、46-1～

3）。（Fig.45）6は砥石兼鍛冶用台石（PL3-18）。片面に無数の小敲打痕がある。裏面は砥石で、全体が砥面になっている他、刃先を立てて研いだ痕跡がある。7は鍛冶用の敲打石（PL3-17）。両面に敲打痕がある。いずれも須玖II式古相のSE03出土。この組み合わせは、弥生中期後半での比恵・那珂での鍛冶の存在を証する。（Fig.46）1は大型の6面砥石（PL3-19）。最も括れた部分で破損しており、本来の全長は倍の34cm前後か。小口面は砥石兼敲打台石で、砥面で目立たないが円形敲打痕がある。中世のSE06出土だが、砥石の類例からは（博多50次、纏向遺跡）、中世というより石製敲打具を使う古墳前期以前だろう。SE06は弥生終末期の完形甕が出土していることが注意される。2は敲打痕のある小台石。中世井戸出土だが、3の敲打石を伴う古墳前期までのもの。（Fig.47）1は五角形型板石硯（久住2020）の一部（卷頭図版4-14）。鈍角の先端2辺は「石鋸」の施溝分割剖痕がある。表面左上辺内側に試し施溝痕がある。表面中央部にかかる範囲に整形痕を切る研磨痕がある。点状に墨痕1箇所が残る。裏面は剥離成形後わずかに粗研磨。厚さ3~4mmの精巧な作りである。（久住猛雄2020「近畿地方以東における「板石硯」の伝播と展開」「第34回考古学研究会東海例会 荒尾南遺跡を読み解く」）

（5）那珂170次出土の動物遺存体

動物遺存体が出土したのは井戸3基（SE01・02・06）で担当者によるといずれも中世に属する。那珂遺跡は火碎流が堆積した低丘陵上に位置しており、酸性土壤のため動物遺存体が残りにくい立地である。遺跡に持ち込まれた動物遺存体のほとんどは消滅し、水気の多い井戸に廃棄されたものの一部が遺存したものであるが、いずれも出土遺存状態は不良で切痕などの表面観察はできなかった。出土した動物遺存体の詳細は表4の一覧表に記載している。

爬虫類 スッポンとスマガメ類が出土した。50001のスッポンは背甲のみで全周縁を欠損しており、現状で13cmを測る。SE02出土のスマガメ類（50003）は2点とも甲羅小片である。生息域からイシガメと

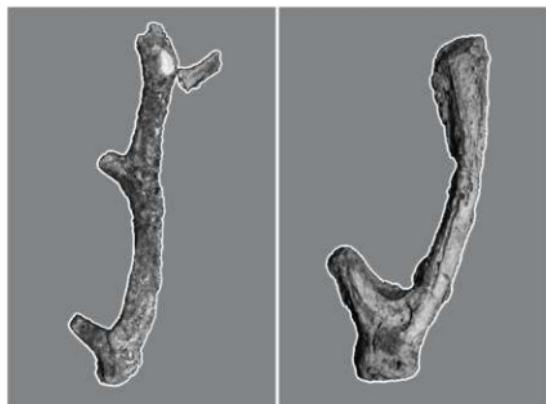


Ph.4 SD102b出土
鉄鎌 X線写真

Ph.5 SE06出土鉄刀子 X線写真

| 地区 | 遺構番号 | 大分類 | 小分類 | 部位名 | 左右 | 部分1 | 部分2 | 中いづれも遺存不良で表面觀察は不可 | | | | |
|---------|--------------------------|-----|----------|-----|------------|-------------|---------|-------------------|----|----|----|-----------------|
| | | | | | | | | 成層度 | 直面 | 火熱 | 年代 | 備考 |
| 50001 | I 区 SE01 R05 | 哺乳類 | スッポン | 青甲 | 左 | 全骨縫合部を欠損 | 不明 | 不明 | 不明 | 不明 | 中世 | 現状で長さ13cm |
| 50002 | I 区 SE02 下層 部 R020 | 哺乳類 | シカ | 角 | 右 | ほぼ完形 | 枝角先端を欠く | 成層 | 不明 | 不明 | 中世 | |
| 50003-1 | I 区 SE 0.2 西縁、下層 | 哺乳類 | マガメ類 | 甲羅 | 不明 | 不明 | 不明 | 不明 | 不明 | 不明 | 中世 | |
| 50003-2 | I 区 SE 0.2 西縁、下層 | 哺乳類 | イシガメ | 青甲 | 助骨板と縁骨板の小片 | 不明 | 不明 | 不明 | 不明 | 不明 | 中世 | 隆条はない。 |
| 50004 | I 区 SE 0.2 EL-220 ~ -260 | 哺乳類 | シカ? | 角? | 不明 | 不明 | 不明 | 不明 | 不明 | 不明 | 中世 | |
| 50005 | I 区 SE02 薩込み EL-250cm土まで | 哺乳類 | イルカ・クジラ類 | 歯 | 複数のみ | 不明 | 不明 | 不明 | 不明 | 不明 | 中世 | 径 1.7cm |
| 50006 | I 区 SE06 面方 R003 | 哺乳類 | シカ | 角 | 左 | 角座から第2枝の下まで | 助骨 | 不明 | 不明 | 不明 | 中世 | 角幹が細く短い 自然落角 |
| 50007 | I 区 SE01 井戸側溝达-250cm以下 | 不明 | 不明 | 不明 | 不明 | 不明 | 不明 | 不明 | 不明 | 不明 | 中世 | |

表4：那珂170次出土動物遺存体一覧表



Ph.6 SE02出土50002鹿角

Ph.7 SE06出土50006鹿角

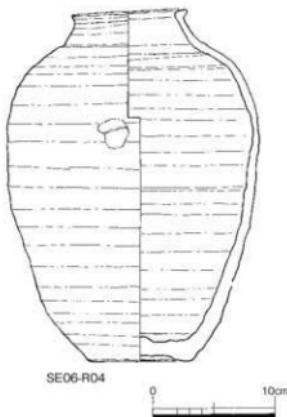


Fig.48 SE06出土遺物実測図補遺図 (1/4)

クサガメのどちらかである。
50003-1は詳細な部位不明で種も不明、50003-2は肋骨板と縁骨板で肋骨板に隆条がないためイシガメと思われる。

哺乳類 鹿角とイルカ類の歯が出土した。鹿角はSE02とSE06から1本ずつ出土しており、50002の鹿角は右側の角、50006は左側の角でどちらも自然落角したものと思われる。50002は出土後細片化しつつあるがほぼ完形。

50006は角座から第2枝の直下まで、それから上は欠損

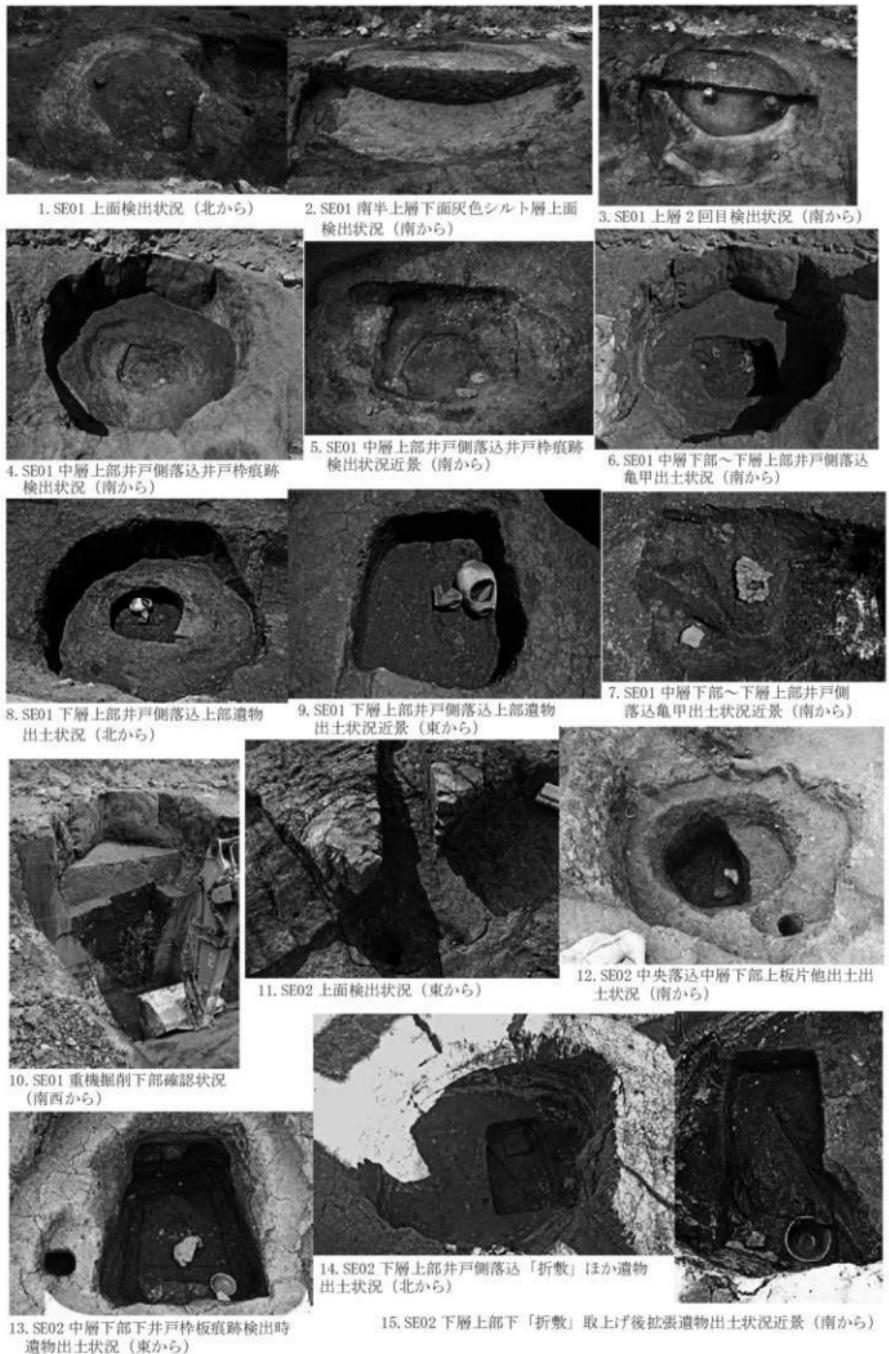
しているが、角幹が細いことから幼い個体の角と思われ、完形に近い可能性がある。現状で20cmを測る。50005のイルカ類の歯は1点で歯根部のみの出土である。

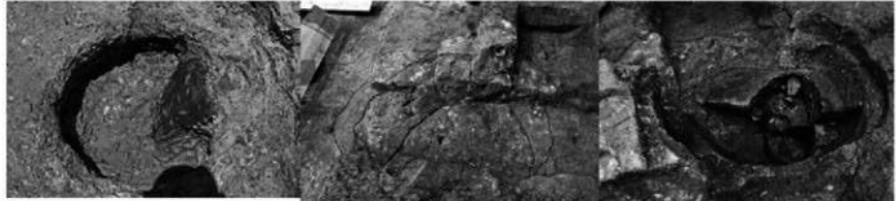
まとめ シカとイルカ類については中世遺跡で多く出土する動物種である。鹿角は近代になるまで骨角器の素材として多く利用され切削痕が残る破片が多く出土するが、今回の様に完形に近いものやまだ素材として利用できるものが出土地ことが多い。今回は井戸からの出土で廃棄時に完形であったと思われることから祭祀に使用された可能性を考えられる。 (この項、福岡市埋蔵文化財課 屋山洋)

III. 調査のまとめ

すでに紙幅が少ないので簡潔にまとめておく(卷末の

「抄録」で補足する)。調査区北半のI区では弥生時代中期の井戸1基と中世の井戸5基がみられた。いづれも井戸側痕跡が認められた。弥生中期の井戸は、須玖I式新相の掘削とすれば那珂では最古である。須玖II式古相の一括資料と鍛冶具が注目される。調査区南半のII区では、SD101が南側の104次と合わせ、古墳時代初頭の方形周溝墓であることが明らかになった。周囲での同時期前後の墳墓域の展開が予想される。また井戸や溝からは明確な遺構がない各時期の遺物も多く出土し、生活痕跡の長期間の継続が判明した。





1. SE02 最下層上部井戸側枠材遺存
状況（南から）

2. SE03, SX04 上面検出状況（南から）

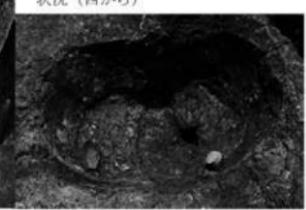
3. SX04 西側半裁・中央ピット遺物出土
状況（西から）



5. SE03 北西部最上層土器出土状況
(南から)



6. SE03 西側上層遺物出土状況近景
(西から)



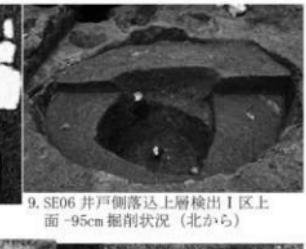
4. SX04 完掘・下層遺物出土状況近景
(西から)



7. SE03 下層掘削遺物出土状況（東から）



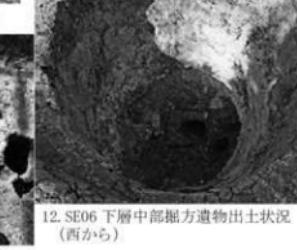
8. SE03 下層遺物出土状況（西から）



9. SE06 井戸側落込上層検出Ⅰ区上
面 -95cm 挖削状況（北から）



11. SE06 下層上部遺物出土状況（南から）



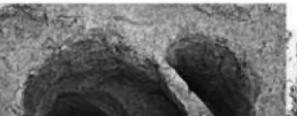
12. SE06 下層中部掘方遺物出土状況
(西から)



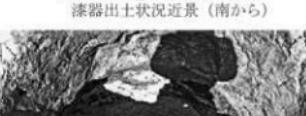
10. SE06 中層上部掘方内鹿角・
漆器出土状況近景（南から）



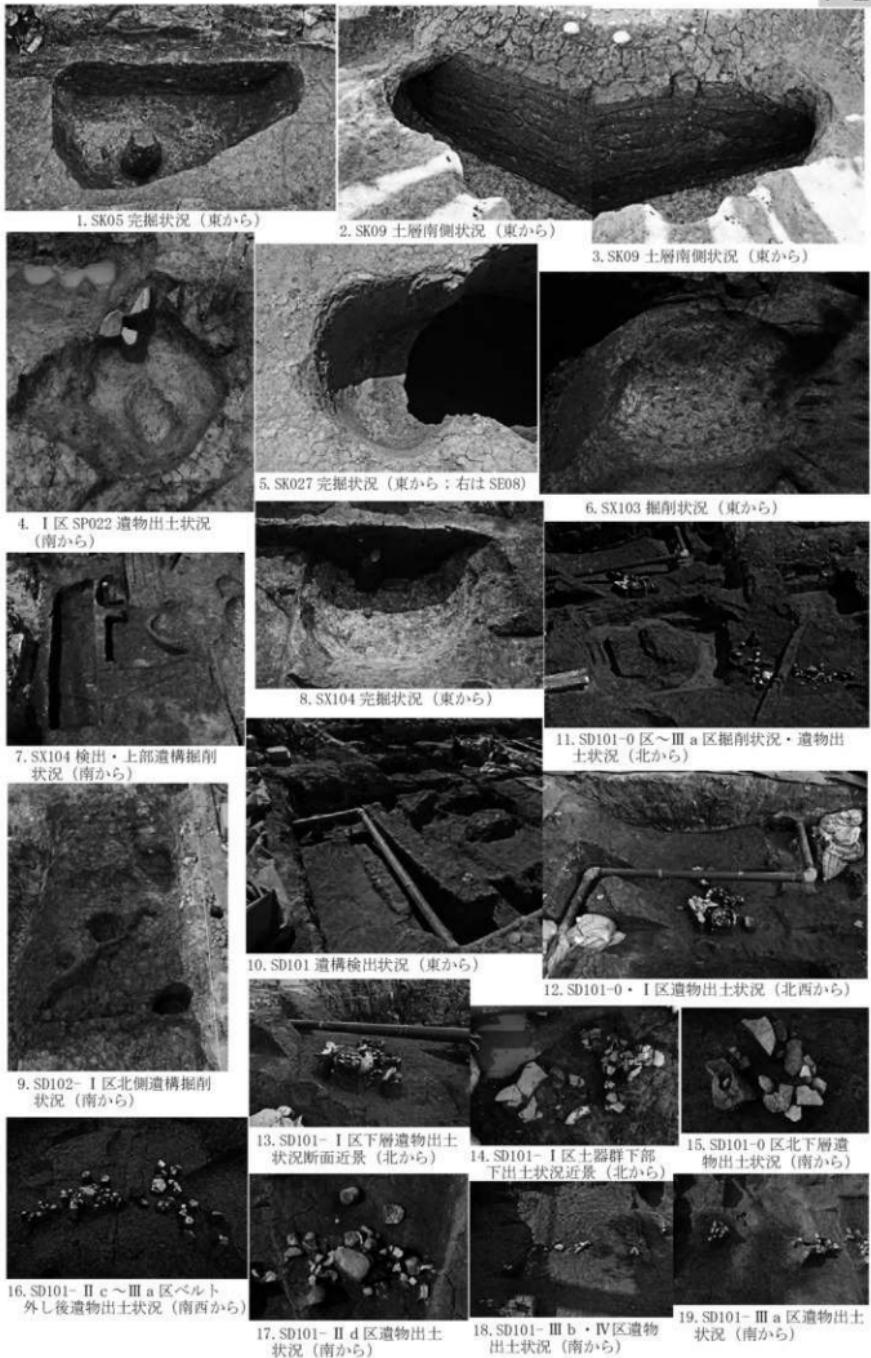
13. SE06 最下層 EL-430cm 前後
出土横木状木杭



14. SE08 井戸側落込 EL-215cm まで掘削
状況（西から）

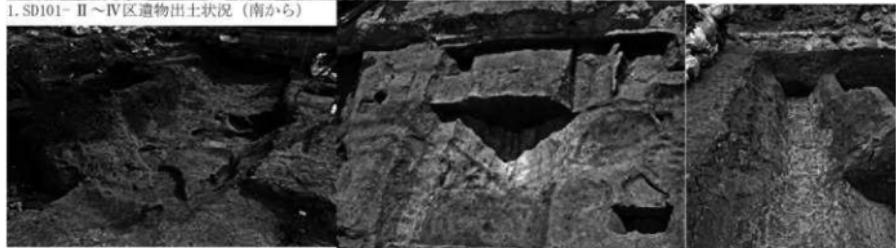
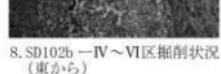


15. SE08 最下層砾群検出状況（西から）





1. SD101- II ~ IV区遺物出土状況 (南から)

4. SD101- III b ~ IV区完掘、底面凹凸状況
(東から)

14. 48 (対向する正面)



報告書抄録

| | |
|--------|--|
| ふりがな | なかーごなーなかいせきぐんだい170じちょうさのはうこくー |
| 書名 | 那珂80 |
| 副書名 | —那珂遺跡群第170次調査の報告— |
| 卷次 | |
| シリーズ名 | 福岡市埋蔵文化財調査報告書 |
| シリーズ番号 | 1391 |
| 編著者名 | 久住猛雄 |
| 編集機関 | 福岡市教育委員会 |
| 所在地 | 〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8-1 電話番号 092-711-4667 |
| 発行年月日 | 西暦2020年3月25日 |

| | |
|------------------------|-----------------------------------|
| 遺跡名ふりがな | なかいせきぐんだい170じちょうさ |
| 遺跡名 | 那珂遺跡群第170次調査 |
| 所在地ふりがな | ふくおかはかたなか3ちょうめ10ぼん1ごうなかしょうがっこうちない |
| 遺跡所在地 | 福岡市博多区那珂3丁目10番1号那珂小学校地内 |
| 市町村コード | 40132 |
| 遺跡番号 | 0085 |
| 北緯 | 33度34分14秒 (世界測地系) |
| 東経 | 130度26分19秒 (世界測地系) |
| 調査期間 | 2017.4.25~2017.6.22 |
| 調査面積 (m ²) | 262m ² |
| 調査原因 | 留守家庭子ども会施設改築建設工事 |

| 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|-------|---|--|---|---|
| 集落、墓地 | 弥生時代、古墳時代、飛鳥時代、奈良時代、平安時代、鎌倉時代、室町時代～戦国時代 | 井戸6基、溝状遺構2条（中世城館塙状大溝1）、方形周溝墓周溝1）、貯藏穴2基、土坑7基（うち1基は「大柱」遺構の可能性）、円形緊穴住居痕跡2棟、掘立柱建物痕跡、柱穴 | 弥生土器（早期、前期、中期、後期、終末期）、土器類（古式土器類）、古墳時代後期、飛鳥時代、平安時代、鎌倉時代、室町時代、戦国時代、須恵器（古墳時代後期、飛鳥時代、奈良時代、平安時代、鎌倉時代）、瓦器（平安時代、鎌倉時代）、陶質土器（古墳時代前期）、輸入陶磁器（平安時代、鎌倉時代、室町時代、戦国時代）、瓦質土器（室町時代、戦国時代）、国産陶器（室町時代）、瓦（初期瓦～系統鳥時代）、弥生時代早期～中期の打製石器（石核、剥片石器、石核、スクレイパー）、弥生時代～古墳時代前期の磨製石器（石包丁、石斧、砥石、鍛冶用台石、鍛冶用石製敲打具、板石硃）、古墳時代～中世の石製品（滑石製鏡、石鍋転用温石、石錐、砾石、磨石、石磨、白石、白石など）、铁器（铁製小刀・刀子、铁鍬、铁鋤など）、木製品・漆器（折敷、漆器椀）、井戸枠材・板状製品破片）、動物遺存体（亀甲、鹿角など） | <p>・I区（北半調査区）井戸6基を検出。SE03のみ弥生中期。他是中世。弥生時代の井戸も含めて、全ての井戸に井戸鶴痕跡が認められ、また比較的深い井戸であった。</p> <p>・弥生中期の井戸SE03は、須恵I式新相に掘削、その後再掘削（井戸幅の再構築）が須恵II式古相にあり、廃棄時も須恵II式古相の一括土器と石製鍛冶具を伴っている。埋没後に上層に掘削されたSK04は、須恵II式古相の「大柱」遺構の可能性がある。</p> <p>・I区には弥生時代前期前半の貯蔵穴が2基あり（SK05、SK09）、SK05は板付I式の一括資料を作った。</p> <p>・I区南東からII区北東にかけて、推定弥生中期の円形窓穴住居痕跡が複数認められた。</p> <p>・II区は中世後半（15～16世紀）の城館の壕の一部の可能性がある大溝（SD102）と、雨樋の那珂104次の遺構に連続する古墳時代前期の方形周溝墓（SD101）が検出された。</p> <p>・方形周溝墓SD101は、古墳時代初頭に當まれ、周溝から古墳初頭～前期中頃までの供獻土器群が出土した。古墳前期中頃に周溝外縁部が再開削された可能性がある。</p> <p>・方形周溝墓SD101は、古墳時代初期に當まれ、周溝から古墳初頭～前期中頃までの供獻土器群が出土した。古墳前期中頃に周溝外縁部が再開削された可能性がある。</p> <p>・大方溝周溝墓SD102は、大方溝（SD102a）と、埋没後に片側外縁に再掘削された小溝（SD102b）に分かれる。</p> <p>・那珂170次調査では、明確な遺構が無かった時期の遺物も多く出土し、削平で失われた各時期の連続と継ぐ遺構の存在が推定される。</p> |

那珂 80

—那珂遺跡群第170次調査の報告—
福岡市埋蔵文化財調査報告書第1391集

2020年3月25日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷 福岡市博多区吉塚8丁目7-30
株式会社 宣巧社

